

学部・研究科名 農学研究科

学部長・研究科委員長名 上原真理子

学科名・専攻名 農学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☐ 講じている ☒ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	カリキュラム・ポリシーに基づく授業科目の設定を行っているが、農学専攻は各研究室がそれぞれの専門学会分野にあたり、専門領域が非常に広範、多岐に渡るため、授業科目・内容についての見直しについては苦慮しているのが現状である。	研究科全体院生ポスター発表会への参加はコロナ禍で全員参加とはいかなかった。また昨年度実施した専攻内院生発表会を本年度は実施できなかった。	シラバスの改訂を行い、基準を順守して成績評価を行った。学位授与についても新しい規定に従って実施された。	科目評価では成績により、演習科目ではプレゼンテーションを中心に発表内容の総合的な評価を実施しているが、前期はコロナ禍で講義実施に制限があり、一部の内容が実施できない内容があった。	教育課程及びその内容、方法について、専攻内会議で随時問題点をチェックし、全教員内で情報共有を図り、改善・向上に努めている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・植物生産、植物病理、機能開発、ポストハーベスト、昆虫学など多岐に亘る内容の科目が開講されている。	【長所】 多岐に亘る分野をもつ専攻の特徴を生かし、プレゼンテーション能力、理解力を高めている。	【長所】 特論、演習科目により各自の専門性を、選択科目でより広い農学関連の知識を習得できる。	【長所】 中間報告などを通して学習状況、進行状況を随時把握できている。	【長所】 本専攻は広い学問分野、学会に属する教員が所属し、様々な情報が共有されている
	【特色】 ・各分野の基礎的な内容である特論科目に加え、演習科目でより深く、応用的な内容が提供されている。	【特色】 多岐に亘る学会で活躍する院生が一堂に会し、発表・議論する場である。	【特色】 演習でのプレゼンテーションを通じて、思考力、問題解決能力の向上を図っている。	【特色】 専攻内の広い分野に属する教員がそれぞれの学位論文の進行状況を相互にチェックできる。	【特色】 広い学問分野、学会に所属する教員により構成される専攻で、多面的な考え方が共有されている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・開講科目全体の位置付けや基礎と応用の関連性などの検討が未だ不足している。特にコロナ禍で検討が不足した。	【問題点】 コロナ禍の中でいかに効果的に実施できるかの検討が必要である。	【問題点】 なし	【問題点】 前期はコロナ禍で講義実施に制限があり、一部の内容が実施できない内容があった。	【問題点】 なし
	【課題】 ・シラバス改訂の効果の検討が今後の課題に挙げられる。	【課題】 年次計画の中に組み込み、発表者がスムーズに取り組めるようにする。	【課題】 なし	【課題】 今年度から始まった複数指導体制の実施内容の評価。	【課題】 なし
根拠資料名					

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に 対する 現状説明	推薦入試に多くの応募希望者があり、入試情報の周知を図ることができたことから、専門性を重視したかたちでの入学者選抜を行うことができた。	年に3回（推薦，Ⅰ期およびⅡ期）行われる入試時期に，その時の状況等について教員間でのディスカッションを行い，適切性について十分な取り組みを行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・遅くとも研究室配属がきまる学部3年次のころから，大学院進学に関する情報をあたえることができ，より意欲の高い学生に早期のうちに高いレベルに引き上げることができている。	【長所】 ・入試の回数が多いため，必然的に入試の実施について検討する機会が増加する。
	【特色】 ・学部在籍の早いうちから，より高度な専門教育や研究をめざす人材を発掘することができている。	【特色】 ・多数行われる面接等の機会により，学生の研究意欲をより適切に評価できるようになる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・比較的早期（推薦およびⅠ期）のうちに入学枠の大半を満たすことになるため，Ⅱ期の時点で優秀な学生を取り損なう可能性がある。	【問題点】 ・早期に実施される入試（推薦およびⅠ期）においては教員側の意欲も高いことが多いが，Ⅱ期の時点になるとやや意識が低下する可能性がある。
	・定員枠を上回ることをあまり気にせず，優秀とみなされた学生については，全体的な総枠に対する在籍数を勘案しながら，積極的に選抜していけるようにしたい。今年度は一部入学辞退者があったが定員枠以上の入学者を確保できた。合格しても入学辞退するものが徐々に増えつつあるので，進学にあたっての説明、ディスカッションを増やす必要がある。	【課題】 ・教員側も常に次代の研究者を育成するという使命をよく心得て，常に意識を高く保って進学希望者に接する必要がある。
根拠資料名		

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	農学専攻内の専門分野ごとに、適切な人材が配置されるように心がけている。	大学院が独立した存在ではなく、どちらかといえば学部の上の付属物的な形での存在であるため、どうしても学部における教員組織の充実が先行する傾向にある。	複数指導体制に向けて、順調に昇格人事を進めており、同一専門分野における複数教員による体制が整備された。	専攻内の専門分野が多岐にわたるため、組織的な対応が行われているとはいいにくい面もあるが、できる限り内部での昇格者を登用するなど、組織の充実に努めている。	必ずしも定期的な点検は行っていないが、学部・大学院再編等による教員の異動が予想されるため、適切な組織体制の維持・構築に向けて検討を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・種々の教員による専門的な指導体制が構築できる。	【長所】 ・学部における教員編制が充実すれば、それに伴って大学院の組織も充実する。	【長所】 ・若くて優秀な指導教員の出現により、当該分野における進学者を多数確保できる。	【長所】 ・内部昇格者は専攻内の現状に通じており、今後の発展性についても適切な判断が下せる。	【長所】 ・学部・大学院再編による大きな異動があらかじめ予想されているので、これに対応して組織の適切性を検証できる。
	【特色】 ・同じ専攻とは思えない多様な人材を育成可能である。	【特色】 ・教員歴の長い経験豊富な指導教員を配置することができる。	【特色】 ・各専門分野において新進気鋭の研究者を確保している。	【特色】 ・学部学生時代から継続的に指導体制を整えることができる。	【特色】 ・現状における人材登用予定分野が明確である。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・大学院改組に伴い博士前期課程の体制が変わることへの対応が必要である。	【問題点】 ・短期的な状況変化に対応することが難しい。	【問題点】 ・指導体制が整備されたものの、一部の分野で複数体制による指導(准)教授の配置ができていない。	【問題点】 ・常に内部昇格者を確保することができ るわけではなく、分野によっては厳しい状況にあるところも見受けられる。	【問題点】 ・人材を補充すべき分野は明確であっても、有資格者を簡単に確保することはできない。
	【課題】 ・ある程度長い目で見て専門分野ごとの教員の育成を図る。	【課題】 ・外部からの人材導入も含め、時につなぎ的な人事体制を構築する必要性も考えられる。	【課題】 ・各分野において、できる限り昇格者による指導体制構築が求められる。	【課題】 ・学部人事の編制に際しても大学院組織のことを十分に考慮してもらうよう配慮をお願いする。	【課題】 ・学部改組に合わせた、教員組織体制のチェックが必要である。
根拠資料名					

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名上原 万里子

学科名・専攻名畜産学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☐ 講じている ☒ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	平成 30 年度から大学院講義の内容・重複などを見直し、新カリキュラムを実施しているが、専攻名称変更に伴い令和 4 年度からはさらに研究室ごとの機関科目を中心としたカリキュラムに改正予定である。	専攻全体での研究進捗プレゼンテーションの機会を設定し、専攻全教員が院生の研究の進展を把握する多重なサポート体制、また院生相互が切磋琢磨する環境を整備している。 特別講義において積極的に外部講師を招喚し先端研究を学ばせている	各教員が成績評価を適切に実施し、学位取得のための口頭発表審査会は専攻内の指導教授全員が出席して、全体で学位授与の決定を実施している。	大学院に進学した時点で、専攻説明会において学位授与方針を説明している。また、年 2 回の畜産学専攻全体での研究進捗プレゼンテーションにより、担当指導教授以外にも複数の専攻内の教員で学習成果を把握、評価している。	専攻全体では平成 30 年度にカリキュラム改正を行ったが、令和 4 年度にも新専攻名称に即した改正を予定している。さらに授業担当者は各自、大学で実施している授業評価アンケートの結果を考慮し、講義内容の改善や向上を試みている
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・畜産学に関するより幅広い最新知識を得られるようにしている。	【長所】 専攻教員全体で大学院生へのサポートが可能である。また、研究室外学生との交流により、新たな発想を得る機会となっている。	【長所】 偏りの無い評価を行うことができる。	【長所】 特になし	【長所】 担当者をできる限り複数にすることで、自己点検のみならず教員相互の点検が可能となる。
	【特色】 ・特別講義を配し、外部講師による畜産の専修分野を幅広く俯瞰した最新の専門知識の習得が可能になった。	【特色】 大学院生同士のディスカッションにより、切磋琢磨できる。	【特色】 特になし	【特色】 特になし	【特色】 特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・令和 4 年度からの新カリ必修科目研究倫理に精通した講師の確保	【問題点】 今年度はコロナの影響でプレゼンテーションの機会が減少した	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし
	【課題】 ・特になし	【課題】 リモートでのプレゼンテーションに対する質疑応答の活性化	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし
根拠資料名	◆大学院シラバス、◆大学院学生便覧、◆履修ルールやモデル、◆特別講義実施記録、◆専攻 3 ポリシー	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料◆研究進捗プレゼンテーションの実施記録	◆大学院シラバス、◆学位論文審査基準、◆口頭発表審査会実施記録	◆専攻説明会実施記録、◆研究進捗プレゼンテーションの実施記録、◆専攻 3 ポリシー	◆授業評価アンケート、◆授業評価アンケートに対する改善計画書

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	大学院入試説明会の際、大学院進学希望学生全員に対し、アドミッション・ポリシーおよび入試制度について説明をしている。 入試の点数や順位などは、指導教授全員で確認を行い、公正に実施している。 推薦入試制度について、平成 31 年度から実施時期が 5 月となり、学生・教員とも被推薦者の適正を見極めることが困難と考え、一旦停止した。現在は推薦入試の復活に向けて各研究室教員が学部 3 年の早い時期から学生の適性を見極めるため試行錯誤している。 令和 2 年度は covid19 により I 期、II 期ともリモート入学試験を行った。このため遠隔地試験のシステムを構築することが出来た。	I 期および II 期入試採点時には指導教授相互に情報公開とディスカッションを行っている。 推薦入試については実施時期の早期化により学生の適正を見極めることが困難であること、GPA に下限を設けると農業高校出身者や、万能ではないが専門に優れており、進学後に成長が見込まれる者を救い上げることが出来なくなり、当専攻が考える推薦入試のメリットが無くなると考え、一旦停止している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・外出禁止状態でも入学試験を実施することが出来る	【長所】 ・特になし
	【特色】 ・受験の機会を増やすことができる	【特色】 ・2 回の入試を行うことで現状、定員を満たすことが出来ている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・畜産学専攻では推薦入試制度を導入したが、入試実施時期の早期化により学生・教員とも被推薦者の適正を見極めることが困難と考え、一旦停止している。学部 3 年生の時点で学生の資質を評価し、推薦に値する者を見極めることは困難である。	【問題点】 ・畜産専攻はほぼ全員が学内からの進学者である。学部改組により学部生数は 2 割強減少しており、このままでは 2022 年度進学希望者の減少が危ぶまれる。
	【課題】 ・学部 3 年生の適性を教員が早期に見極め、推薦入試制度の復活を検討する	【課題】 ・院生確保のためより現状より早い時期から学部生への大学院進学を意識させ、推薦入試を再開させる必要がある。
根拠資料名	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料、◆専攻 3 ポリシー、◆大学院入試説明会の実施記録（参加者数等含む）、◆大学院入試志願者数表	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料、◆研究進捗プレゼンテーション実施記録

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	各専門分野に適切な人員を配するとともに、若手教員が大学院授業担当者に昇格できるよう、各指導教授および若手教員自身に積極的に周知している。 また、大学の理念・目的、研究科の教員組織の編成に基づき、専攻の教員組織の編成方針を作成し、本学のホームページ上で公開している。	大学院授業担当者を増やすことで、大学院教育研究活動の更なる向上を目指している。	専攻の各指導教授に対し、昇格申請の案内を積極的に実施している。令和元年には2名が指導教授に、令和2年には1名が准教授に昇格している。	年に2回の頻度で、畜産学専攻全体での研究進捗プレゼンテーションを行っている。専攻の教員全体で大学院生の研究の進展および生活状況を把握し、院生に対する教員の指導が適切に行われていることを確認する機会としている。 令和2年度は遠隔授業導入を余儀なくされたため、通信教育実施のためのスキルアップが図らずも行われた	学部再編に伴い、できる限り適切な人員配置になるよう努力した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・各分野に専門性の高い教員を組織できる	【長所】 ・同一分野に職階の異なる複数教員を配置できる	【長所】 ・特になし	【長所】 ・継続した資質向上を見極めることが出来る。	【長所】 ・特になし
	【特色】 ・幅広い分野に対応する教員が確保できる	【特色】 ・数十年単位で同一分野の研究活動を継続することができる	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・年齢構成がうまくいかない場合がある	【問題点】 ・昇格が停滞し、最適な人材が揃わず、指導教授、大学院指導教員の分野が偏る場合がある	【問題点】 ・資質向上のための方策を立てることが物理的に困難である	【問題点】 ・学部の編成が優先されるため、本専攻にとって必ずしも最適の人材を確保できていない。
	【課題】 ・特になし	【課題】 ・年齢構成の是正を図る	【課題】 ・昇格が停滞する場合には外部から臨時の指導体制を構築するなどし、昇格を促すとともに、教員候補となる学内出身者の育成が必要である。	【課題】 ・特になし	【課題】 ・専攻教員全体で議論し、組織の適切性を判断し改善できる場を設定する必要がある。
根拠資料名	◆専攻の教員編成方針、◆学科（専攻）教員配置表一年齢、性別、国際性、職階を示すもの	◆学科（専攻）教員配置表一年齢、性別、国際性、職階を示すもの	◆教務職員資格審査基準及び関連書類	◆研究進捗プレゼンテーションの実施記録	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料、◆学科（専攻）教員配置表一年齢、性別、国際性、職階を示すもの

学部・研究科名 農学研究科

学部長・研究科委員長名 上原 万里子

学科名・専攻名 バイオセラピー学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☐ 講じている ☒ 一部講じている ☐ 講じていない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	学生主体のセミナーを実施する予定であったが、コロナ対策により専攻全体でセミナーの開催はできなかった。そのため各研究室で対応せざるを得なかった。シラバスの内容の確認を専攻内で実施。修士・博士論文中間発表会、修士論文発表会の対面による口頭発表を実施。	学生主体のセミナーを実施する予定であったが、コロナ対策により専攻全体でセミナーの開催はできなかった。そのため各研究室で対応せざるを得なかった。そのため指導教授および研究室教員による学生の指導をきめ細かくなるように配慮した。 修士・博士論文中間発表会、修士論文発表会の対面による口頭発表を実施。	年度始まりの専攻ガイダンスにおいて取得について説明を行った。専攻全体で中間発表会および最終発表会の実施、要旨の作成・公開および論文の全指導教授による閲覧を実施し、研究内容及び完成度を確認した。	専攻全体で中間発表会および最終発表会の実施、要旨の作成・公開および論文の全指導教授による閲覧を実施し、研究内容及び完成度およびバイオセラピー学専攻の理念を学生各自が持つことができたかを確認した。	中間発表会を開催し、研究状況の把握を行い、専攻全体で各学生に適切な研究・教育指導が行われているか、点検・評価した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 対面による口頭発表を実施により、詳細に各研究内容を専攻全体で掌握できた。	【長所】 コロナにより対面による各発表会の実施が難しかったが、会場の設定と三密に分けるための対策を講じて実施した。またオンラインにより学部・大学院学生の参加を促した。	【長所】 コロナにより対面による各発表会の実施が難しかったが、会場の設定と三密に分けるための対策を講じて実施し、学生に発表の機会をつくることができた。	【長所】 コロナにより対面による各発表会の実施が難しかったが、会場の設定と三密に分けるための対策を講じて実施し、学生に発表の機会をつくることができた。	【長所】 コロナの状況下であったが対面による発表会を実施することにより、オンラインだけでは得られない、発表の臨場感を得ることができた。これは人に自分の考えを伝えるうえで極めて重要である。
	【特色】 バイオセラピー学専攻の理念を認識させることができた。	【特色】 各学生の現在の研究状況を専攻全体で把握できると共に、バイオセラピー学専攻の理念を考えて行くように指導できた。 オンラインによる他専攻の教員の参加もあり、貴重な意見を得ることができた。	【特色】 修士論文発表会終了後に各学生の評価を審議し、2年間の学会参加および論文投稿状況を全指導教員により確認および評価を実施した。	【特色】 修士論文発表会終了後に学位授与方針にそって研究成果がまとめられているかを全指導教授により評価した。	【特色】 専攻全教員の参加のもとで開かれた発表会により、様々な角度からの意見を得ることができる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 コロナの影響により全体でのセミナー開催ができなかった。	【問題点】 コロナによる登校および調査制限により学生の研究への意欲の喪失。	【問題点】 コロナの影響により各学生の研究への意欲の低下。	【問題点】 コロナによる登校および調査制限により仮説に沿った研究を遂行することができなかった学生がいた。	【問題点】 コロナにより実験および調査の質に差が生まれ、仮説の検証が困難になることがあった。

	【課題】 学生の大学への登校制限、野外調査への制限により、仮説にそった実験、調査が実施できなかった。	【課題】 コロナの状況下を事前に想定することは困難であるが、学生への指導体制の専攻全体で再検討する必要がある。	【課題】 コロナの状況下を事前に想定することは困難であるが、学生への指導体制の専攻全体で再検討する必要がある。	【課題】 コロナの状況下を事前に想定することは困難であるが、学生への指導体制の専攻全体で再検討する必要がある。	【課題】 コロナの状況下を事前に想定することは困難であるが、学生への指導体制の専攻全体で再検討する必要がある。
根拠資料名	各発表要旨（資料 1-2、2-2）	会議資料（資料 4）	修士論文発表関係資料（資料 2）	修士論文発表関係資料（資料 2）	修士論文発表関係資料（資料 2）

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	学部改組によるバイオセラピー学科の廃止に伴い、当専攻の最後の博士前期課程入試の実施 新学科の大学院開設による教員の移動 指導教授の確保と運営 新規指導教授および授業担当教員の人事案件	バイオセラピー学科の募集停止により、専攻の運営が今後の課題である。特に博士後期課程の指導体制の将来的な人事計画。 新規指導教授および授業担当教員の確保
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 新規指導教授および授業担当教員の確保を進められた。	【長所】 新規指導教授および授業担当教員の確保を進められた。
	【特色】 新たな人材の確保により教育の幅を広げることが可能になった。	【特色】 新たな人材の確保により教育の幅を広げることが可能になった。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 今後の専攻の維持をどのように行っていくのか 教員の配置 学部改組による研究室の消滅、専攻学生の意識	【問題点】 今後の専攻の維持をどのように行っていくのか？ 新専攻の設置による教員の移動と当専攻の教員配置 学部改組による研究室の消滅、専攻学生の意識
	【課題】 改組に伴う消滅研究室における学生の意識 新学科学生と旧学科出身の専攻生との協調性の維持	【課題】 改組に伴う消滅研究室における学生の意識 新学科学生と旧学科出身の専攻生との協調性の維持と理念の在り方
根拠資料名	大学院学生便覧（科目担当教員）	大学院学生便覧（科目担当教員）

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	③	④	⑤	⑥	⑥
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	■ している □ 一部している □ していない	■ している □ 一部している □ していない	■ 行っている □ 一部行っている □ 行っていない	■ つなげている □ 一部つなげている □ つなげていない	■ 行っている □ 一部行っている □ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	専攻の理念に適った教員配置に基づき教員を研究室に配置している。 1. 農学を基盤とした生き物・環境・人とそれらの関係性に関する理解を有する教員 人の健康と福祉に資する福祉農学の発展に寄与する意欲を備えた教員	新たな指導教授および授業担当教員配置によりの、さらに学際的な要素が強い教員組織編成ができた。	新たな指導教授および授業担当教員配置によりの、さらに学際的な要素が強い教員組織編成ができた。	教員によるセミナーの開催を予定していたが、コロナのため開催ができなかった。そのため修士および博士論文中間報告会を対面で実施した。	教員によるセミナーの開催を予定していたが、コロナのため開催ができなかった。そのため修士および博士論文中間報告会を対面で実施した。
現状説明を踏まえた 長所・特色	【長所】 新たな指導教授および授業担当教員配置によりの、さらに学際的な要素が強い教員組織編成ができた。	【長所】 専攻内での研究教育の質の確保ができた	【長所】 専攻内での研究教育の質の確保ができた	【長所】 専攻内で共通した討議ができると共にバイオセラピー学専攻の理念を確認することができた。	【長所】 専攻内で共通した討議ができると共にバイオセラピー学専攻の理念を確認することができた。
	【特色】 多彩な人材からなる教員	【特色】 専攻の理念に沿った教育体制が整う	【特色】 専攻の理念に沿った教育体制が整う	【特色】 バイオセラピー学専攻の理念を深めることができた。	【特色】 バイオセラピー学専攻の理念を深めることができた。
現状説明を踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 教員の定年退職による教員の減少 博士後期課程の維持	【問題点】 指導教授退職後の指導教授の確保	【問題点】 指導教授退職後の指導教授の確保	【問題点】 コロナにより対面で会議等を実施することができなかった。意思の共通性を図るのが難しかった。	【問題点】 コロナにより対面で会議等を実施することができなかった。意思の共通性を図るのが難しかった。
	【課題】 教員の補充が無い中での教育・研究の質の維持	【課題】 教員の補充が無い中での教育・研究の質の維持	【課題】 教員の補充が無い中での教育・研究の質の維持	【課題】 教員間の意思の共通性と理解度	【課題】 教員間の意思の共通性と理解度
根拠資料名	大学院学生便覧（科目担当教員） 専攻の教員編成方針	大学院学生便覧（科目担当教員）	大学院学生便覧（科目担当教員）	発表要旨（資料 1、2）	発表要旨（資料 1、2）

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名上原 万里子

学科名・専攻名バイオサイエンス専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	特論・特論実験・特別演習・特別実験・特別研究の必修科目のほか、分野横断的な選択科目（生命情報科学・分子細胞生物学など）および論文英語・プレゼンテーション法など、大学院博士前期、後期課程にふさわしい授業を実施している。特に分野横断型選択科目については、積極的に学外の第一線の講師を呼んで、講義を行っている。	教員、学生間また学生同士の交流を活性化するため、ポスター形式による専攻全体での中間発表会、懇親会などを行っている。	学生の活動率評価、中間報告会、修論発表会等により評価する。	研究室毎のゼミ、授業の習熟度および、専攻全体の発表会に基づき評価している。	研究室毎のゼミ、授業評価等に基づき、全所属教員により定期的に点検・評価し、その結果について専攻会議で慎重に議論し、教育課程の内容と方法を決定している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 先端研究の知識、技術を身につけられる点。	【長所】 学生自身の自主性を尊重する点	【長所】 特になし	【長所】 グループだけでなく個人とのディスカッションを通じてきめ細かな指導を行っている。	【長所】 特になし
	【特色】 外部講師等、学外の情報も積極的に取り入れられる点	【特色】 学部からの内部進学生が多く学生間の交流が活発な点	【特色】 特になし	【特色】 特になし	【特色】 特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	大学院カリキュラム、大学院学生便覧、大学院シラバス、学外講師一覧、専攻3ポリシー	中間発表実施記録、	中間発表実施記録、修論発表会実施記録	専攻全体の発表会実施記録、専攻3ポリシー	

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	アドミッショ・ポリシーに基づき、生命科学に強い関心を持ち、食糧、環境、健康問題の解決にチャレンジできる学生を求めている。大学院進学後に必要な学力を評価するために分子生物学、英語を試験科目として科しており、これらの筆記試験に加え、複数の教員による面接を実施している。全ての科目の試験後に専攻長を中心とした専攻教員全員による入試判定委員会により公正かつ客観的に選抜している。	試験後に選考会議を実施し、専攻の教員で十分に議論した上で選抜する。また研究室毎のゼミだけでなく、中間発表会より専攻全体で適切性について判断する。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 受験生とは選抜試験前からコンタクトを取り、進学後や卒業後の進路についてディスカッションを行っている。	【長所】 一人の学生の教育に複数教員が関与するため公正に点検、評価できる点
	【特色】 面接では専門知識だけでなく人柄も確認できる。	【特色】 特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	大学院入試募集要項、専攻3ポリシー	中間発表実施記録

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	設置の趣旨に基づき、学科の専任教員を配置している。専任教員の採用は、原則として公募し、募集要項にて専門分野に関する能力、教育に対する姿勢などの資質を明記している。 また、大学の理念・目的、研究科の教員組織の編成に基づき、専攻の教員組織の編成方針を作成し、本学のホームページ上で公開している。	指導教授として文部科学省の設置基準を上回る教授13名を配置しており、十分な教育、研究指導を行うことができる。	専攻の教授により構成される人事委員会により以下の根拠資料に基づき実施している。	自己教育評価、授業評価により、授業、研究指導、国際交流、大学運営、課外活動、学外活動を評価している。また、全学的なFD委員会にも参加をしている。また教員全員が原則として科学研究費補助金をはじめとする外部研究資金に申請することになっている。	学部改組に伴い、本専攻の教員組織に関しても教員体制を変更した。動物、植物、細胞分子機能の3分野の体制は維持し、それぞれの分野を専門とする教員を配置した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 生命科学の幅広い分野を網羅できる教員の配置	【長所】 動物、植物、細胞分子機能の3分野にバランス良く教員を配置している点	【長所】 人事委員会による教員体制の定期的な確認	【長所】 外部研究資金の獲得推進	【長所】 3分野に各2研究室というバランス良い教員体制
	【特色】 同上	【特色】 適切な年齢、職位バランスを考慮した採用、昇任を行っている点	【特色】 各活動の点数化による明確な昇格目標の提示	【特色】 外部研究資金への申請	【特色】 複数の女性教員の配置
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	学科（専攻）教員配置表	学科（専攻）教員配置表	◆教務職員資格審査基準及び関連書類	科研費等外部資金申請状況	学科（専攻）教員配置表

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名上原 万里子

学科名・専攻名林学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ 講じている ☒ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	シラバスの内容の点検をしながら授業計画・内容に関する検討を実施。専攻会議他を活用した検討に加え、各分野・研究室間における意見交換等も実施し、体系的な編成を構築するように全教員が取り組んでいる。	研究テーマ、進め方等、大学院生との修学にあたっての協議を継続的に実施している。 大学院生への教育・研究支援は、所属研究室において手厚く行っている。	履修科目に関する授業への出席、試験、課題等を通して成績評価、単位認定を行うとともに学位論文審査を通して学位授与を行っている。さらに分野を超えた専門的知識を有する外部有識者との連携も図られつつある。	学生の修学状況を把握しながら学習成果を評価している。 専攻内の所信発表会、中間発表会および修士論文発表会などを通じ、学位授与方針を満たしているかどうかの判断に差が生じないように専攻内で議論している。また、研究室内での発表によるプレゼンテーション能力の向上を図っている。	シラバスの内容の定期的な点検、授業計画・内容の検討を通じた教育の改善・向上を実施している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 シラバス内容の点検を通して授業の計画・内容の検討・改善に取り組んでいる。	【長所】 各学生の研究の進め方・方向性等、修学の推進に貢献できている。	【長所】 各専修分野を中心としながら実施することによる、より専門的な評価・認定の向上を実現している。	【長所】 各学生に対する個別対応による学習成果の把握・評価の向上を実現している。	【長所】 定期的な点検による教育の内容・指導方法の改善・向上に寄与している。
	【特色】 授業の計画・内容の向上に繋がる。	【特色】 各学生の個別の状況に応じた修学の確保に繋がる。	【特色】 大学院生に対する専門知識の高度化・深化に繋がる。	【特色】 大学院生のテーマに合致した学習成果を適切に向上するプログラムを計画している。	【特色】 定期的な点検・評価による PDCA サイクルを通じた教育の内容・指導方法の改善・向上が期待される
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 コロナ禍への対応には苦慮している。	【問題点】 コロナ禍により進捗の遅れが全般的に観られる。	【問題点】 コロナ禍による学習の遅滞等を加味した評価が困難。	【問題点】 とくに無し。	【問題点】 なし
	【課題】 教員・学生ともに不慣れなリモート学習を余儀なくされる中で、効果的な指導方法の確立が望まれる。	【課題】 複数の教員によるチームサポートの実現を構築するとともに、今般の状況に応じた教育体制の検討が急務。	【課題】 非常事態下における学習評価の理念・手法の確立が急務。	【課題】 新研究科移行に伴う、新たな授与方針の確認・確定作業が必要。	【課題】 さらなる充実を期すための創意・工夫。
根拠資料名	◆大学院カリキュラム、◆大学院学生便覧、◆大学院シラバス、◆専攻3ポリシー	◆院生によるレポートおよびアンケート	◆学位論文審査に関する記録他	添付資料「中間・所信発表会プログラム」、◆専攻3ポリシー	◆「シラバス記載内容の第三者によるチェックについて（回答）」

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	入学者選抜制度や試験科目等の見直しおよび問題の難易度に関する検討を実施している。入学者選抜にあたっては他大学からの受験者に対する考慮もしながら、公正に実施している。コロナ禍の影響により、初めてのオンラインによる選抜となったが、目立った不都合等は認められなかった。Ⅰ期試験においては、進路が定まっていなかったり研究への魅力を感じている程度が低い学生も散見されたが、研究を積み重ねることで進学意欲が高まることも多いためⅡ期試験における受験希望者の扱いと入学希望者の発掘にも力を注ぐ。	入学者選抜試験時に点検・評価を実施するとともに毎年、学生の受け入れの適切性について点検・評価を実施している。学部学生や博士前期課程の学生に対する進学受入れの意欲向上に向けた専攻内での相互点検も実施している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 公平・公正な選抜制度の運用を実現できている。 社会情勢、経済状況に対応しながら制度・体制を整備することが大切であり、意識的に取り組んでいることは長所として捉えている。	【長所】 定期的な点検・評価による学生の受け入れに関する改善・向上に繋がる。
	【特色】 社会情勢、経済状況の変化に対応した柔軟な制度・体制づくりが期待できる。	【特色】 定期的な実施による PDCA サイクルを通じた改善・向上が期待できる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 コロナ禍により、学部生時代の学習に遅滞があることから、大学院の選抜においてその程度をどのように加味するべきであるのかについて試行錯誤の段階にある。	【問題点】 心理的ストレスを有する大学院生の増加。心理カウンセラーによる対応を必要とする院生の把握と適切指導の判断。
	【課題】 問題点とした点については、その影響が今後数年間におよぶことが予想されるため、具体的な対応策を検討する。また、改組に伴う学位名称や分野の主たる領域、従たる領域を明確に理解してもらう広報戦略を課題として考えている。	【課題】 教員間で情報を共有しつつ、協力しながら具体的に解決していくことが必要。専攻内に教育点検の委員会を設置し、検討を継続する。
根拠資料名	入試説明会の開催 ◆大学院入試募集要項、HP 等、◆専攻3ポリシー	◆入試選考委員会実施記録等

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	林学専攻教員組織の編成方針を作成し、公表している。 基本的に毎週実施している専攻会議において、随時実施している。	学部改組に伴い教員数が減少するなか、柱科目を中心に専任教員を配置し、不足を非常勤講師で補うなど適切に編制している。 研究室単位でバランスの取れた年齢構成に心がけている。 教員の授業負担に配慮しながら時間割編成するよう努めている。	教員の昇任は専攻会議にて審議し、指導教授により構成される委員会にて適切に決定している。	研究室単位で発表会を行うなど、若手教員のFD向上がみられる。 専攻独自にFD研修会などは開催していないが、積極的に学内のFD講習会に参加している。また、参加を推進している。 授業評価アンケート実施とその結果を適正に認識して学生指導している。	教員の研究業績、社会活動について専攻内で共有し、点検・評価することを奨励している。 若手教員指導体制が確立するよう意識した活動を計画している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 教員組織の編成方針作成による編制を明確化している。	【長所】 専修分野に対応した教員組織の明確化に繋がる。	【長所】 会議を通じた情報の共有・議論の展開に寄与	【長所】 会議を通じた議論・検討の機会を確保できている。	【長所】 定期的な点検・評価による教員組織の改善・向上に寄与
	【特色】 フィールド調査・屋内実験等での研究指導を実施するなど、学生の学習と研究への貢献を実現している。	【特色】 学生の研究に繋がる指導が可能な教員配置を意識している。	【特色】 特になし。	【特色】 特になし。	【特色】 特になし。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 特になし。	【問題点】 教員数の減少が教育の量的・質的な低下をもたらしつつある。	【問題点】 特になし。	【問題点】 雑務の増大が、教員間のコミュニケーションを阻害している。	【問題点】 特になし。
	【課題】 上記の取り組みの継続的な実施。	【課題】 研究室全体での研究・教育・指導を念頭にした教員配置計画を策定する。	【課題】 雑務の増大により論文の執筆活動が停滞している教員がいるため、論文執筆を促すための具体的な工夫が必要。	【課題】 効率的な事務作業等を検討し、十分なコミュニケーションを図る。	【課題】 若手教員の研究力向上のための検討を継続する。
根拠資料名	専攻教員配置表 大学院教員名簿、学生便覧、HP 等	専攻教員配置表 大学院教員名簿、学生便覧、HP 等	専攻教員配置表、学生便覧、HP 等	専攻会議資料	専攻会議資料

研究科名農学研究科

研究科委員長名上原 万里子

専攻名農業工学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	農業工学専攻博士前期課程では、農業工学に係わる技術者、研究者あるいは教育者としての総合力を確立し、地域資源利用学、生産環境・計画学、施設工学、農業生産システム工学における専門知識と、研究および論文作成手法を修得するための科目を体系的に配当し、コミュニケーション能力を増強できるカリキュラムを編成しています。また、博士後期課程は、農業工学に係わる研究者、高度な技術者あるいは教育者としての総合力を確立し、農業工学の専門的課題を自ら解決できる能力を獲得させるため、問題抽出能力、分析能力、企画能力を養うことを目的とし、コミュニケーション能力や問題解決能力を増強できるカリキュラムを編成しています。	専攻全体で行う行事では、学生、教員間の研究交流を重視し、円滑な情報交換により学習効果を高め、活性化する活動に重点を置いています。 大学全体で昨年度から実施している大学院発表会への参加を学生・教員の双方に促し、研究の相互理解を深めるよう取り組んでいます。 なお、今年度は新型コロナウイルス感染症対策のために Zoom を利用した口頭発表、Web を利用したポスターセッションで開催しました。質疑もネットを経由して行われたが、活発なやり取りがあった。	農業工学特別演習や農業工学特別研究については、主査と副査のみならず、大学院担当教員全員の出席のもとに開催される中間発表や最終発表に基づいて、大学院担当教員全員で成績評価とともに単位認定を行い、学位授与の可否を決定しています。特に博士論文の審査報告概要並びに審査報告会実施記録においては、主査が作成した後、全ての大学院担当教員が確認し、提出しています。	博士前期課程では、研究科が定める所定の単位を修得し修士論文を提出するとともに、農業工学に関する専門知識と研究能力を有し、国内のみならず海外の現場での農業工学の専門領域における技術開発や問題解決に役立てる能力を備えた学生に修士の学位を授与しています。また、博士後期課程では、研究科が定める所定の単位を修得し博士論文を提出するとともに、農業工学に関する高度な専門知識と優れた研究能力を有し、国内のみならず海外の現場での農業工学の専門領域における具体的な問題解決に資する高度な能力を備えた学生に博士の学位を授与しています。	大学院生による授業評価をセメスターごとに実施しており、その結果を受けて優先的に対応すべき課題の抽出と分析を行い、改善計画を提出しています。併せて、作成した改善計画に基づき、指導・授業を実施し、次の授業評価で対策の効果を検証するサイクルを継続しています。 なお、今年度は新型コロナウイルス感染症対策のため、対面の授業の実施ができなかったため遠隔のゼミを頻繁に実施するよう努めました。また、従来 1 ヶ月に 1 回実施していた専攻会議を毎週開催し、迅速な感染症対策、大学院生の状況の把握に努めました。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・博士前期課程では農業工学に係わる技術者、研究者あるいは教育者として、また博士後期課程では、農業工学に係わる研究者、高度な技術者あるいは教育者としての総合力の確立を目指している点。	【長所】 ・別の専攻の学生との交流が活発になり、研究生活での学生の孤立が避けられる点。	【長所】 ・学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に基づいて、成績評価とともに単位認定を行い、学位授与を決定している点。	【長所】 ・農業土木および農業機械、環境情報分野の学問を基軸として、国内のみならず海外の現場での技術開発・問題解決と学術的な研究を両立できる高度な能力を持った人材の輩出を目指している点。	【長所】 ・受講生である大学院生の評価に基づいた改善計画を立案できている点。
	【特色】 ・地域資源利用学、生産環境・計画学、施設工学、農業生産システム工学の 4 つの専修で構成し、専修ごとに高度な専門教育を行っている点。	【特色】 ・多くの専攻の学生が一堂に会することから、大学全体での一体感が育まれる点。	【特色】 ・専攻内にある 4 つの専修が合同で学位審査を行っていることから、幅広い見地で評価が行われている点。	【特色】 ・主査と副査のみならず、大学院担当教員全員の出席のもと、中間発表や最終発表を実施し、学習成果とともに研究成果を評価している点。	【特色】 ・1 専修あたりでの学生数が少ないことから、専修全体でのイベントにおいて学生、教員間での交流を密にすることを心掛けている点。

令和 2 年度 基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式 1

現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 ・受講生の少ない科目については、回答した院生を特定できてしまうため、回収率が低く、また、回答内容の信憑性が低くなっている可能性がある点。
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 ・大学院授業評価の方法。
根拠資料名	・シラバス（資料 1-1M, 1-1D） ・専攻会議議事録（資料 1-2）	・専攻会議議事録（資料 1-3） ・中間発表会プログラム（資料 1-4） ・修論発表会プログラム（資料 1-5） ・大学院生研究発表会題目一覧（資料 1-6）	・専攻会議議事録（資料 1-7） ・発表会評価シート（資料 1-8） ・審査報告会実施記録（資料 1-9）	・学位論文（資料 1-10M, 1-10D）	・授業評価アンケート（資料 1-11）

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	農業工学専攻では、以下の学生受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制（推薦入試、一般入試等）を適切に整備し、公平に入学者選抜を実施しています。	満足度評価をセメスターごとに実施しており、その結果に基づいて学生受け入れ時の事前相談や説明会内容の適切性について評価を行っています。 さらにその結果を踏まえて、定期的に学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）の見直しを行っています。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・様々な入学者選抜制度があり、多様な人材の受入を目指している点。	【長所】 なし
	【特色】 ・JICA が幹旋している PEACE や ABE イニシアチブ、SDGs グローバルリーダーなどのプログラム参加留学生の受入れの他、国際協力経験者入試を行うなど海外で活躍できる人材の育成に努めている点。	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・工学分野では求人が多く、就職率が高いため、日本人学生の進学率が低い点。	【問題点】 なし
	【課題】 ・優秀な日本人学生の進学率を向上させること。	【課題】 ・優秀な日本人学生の確保につながる受入れ方法の確立。
根拠資料名	・専攻の説明会の実施 HP（資料 2-1） ・募集要項（資料 2-2） ・入試 HP（資料 2-3）	・アンケート結果を踏まえた改善計画書 2020（資料 2-4）

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	教員組織の編制に関する方針として、農業工学専攻では、以下を明示しています。 農学研究科の教員組織の編制方針を踏まえるとともに、農業工学分野における保有する博士学位や高度な専門能力及び論文作成指導能力に加え、国際化に対応しつつ、人類が直面する農業農村開発と自然環境の保全との狭間で生じる地球規模の諸問題の複雑化に合わせて、多様な教育・研究を展開する教育体制を構築し、建学の精神「人物を畑に還す」のもと、国内だけでなく、世界各国、地域で活躍する優れた高度な人材を育てることを目的として、農業工学分野における高度な専門的能力と学識を備えた研究者及び技術者を養成する研究室体制を構築し、その維持・向上に努めています。 1. 法令（大学院設置基準等）で定められている要件を満たす教員 2. 本専攻の「教育研究上の目的」、「教育目標」及び「3つの方針」を十分理解し、それらに対応する能力と意欲を備えている教員 3. 農業工学分野における高い研究業績を有するとともに、本専攻の構成員として各種運営業務に積極的に取り組める教員	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しています。	資格審査基準等に則り、適切に教員の募集、採用、昇任等を行っています。	一昨年度まで実施していた「農業工学専攻におけるグローバル学術リーダーの育成プログラムの推進プロジェクト」を基に、教員と大学院生が参加できるイベントとして、国籍を超えた文化的な理解を深めるためのイベントを実施していましたが、昨年度は新型コロナウイルス感染症対策で実施を見送りました。来年以降、新たな取り組みを開始したいと考えています。 こうした取り組みは、農業工学専攻の大学院教員の資質向上（FD）を目指しています。	東京農業大学自己教育評価において、定期的に点検・評価に取り組んでいます。

令和 2 年度 基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式 1

現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 女性教員や外国国籍の教員の採用を積極的に進め、多様性を確保しつつある点。	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 ・教員の参加率が高い点。	【長所】 なし
	【特色】 英語が堪能な教員を拡充し、留学生の満足度を高めるのと同時に、日本人学生の国際意識の高揚に努めている点。	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 ・文化的な背景を理解することにより研究交流が活性化する点。	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 ・予算の確保。	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 ・継続的かつ魅力的なテーマの設定。	【課題】 なし
根拠資料名	・専攻内指導教授会議事録（資料 3-1） ・大学院学生便覧（資料 3-2）	・専攻内指導教授会議事録（資料 3-1） ・大学院学生便覧（資料 3-2）	・専攻内指導教授会議事録（資料 3-1）	・専攻会議議事録（資料 3-4）	・アンケート結果を踏まえた改善計画書 2020（資料 2-4）

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名上原 万里子

学科名・専攻名造園学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	2017 年度入学の博士前期課程 1 年生から実施されている現行カリキュラムにおいては、選択必修科目の履修変更や必修科目「造園学総論」などを設定した。専攻内における専門性を高めるとともに、造園学の幅広さと社会的意味など体系的理解の強化、及び 9 月入学等の国際化に対応できるようにした。	研究の進捗状況に応じ、博士前期・後期課程の発表会、検討会、意見交流会を実施し、教員・院生相互の状況把握や問題点の確認などを積極的に取り組めるようにした。本年度は、井上剛宏客員教授の特別講義（10/2 開催）や Osnabruck 応用科学大学とのコロキウム（1/14 開催）を開催した。また、造園調査法詳論においては「コロナ禍における新たな調査法について」というテーマでのレポート課題を課し、現状における研究への取り組み方を再確認した。	専攻内の教員が成績評価を行い、学位授与に際しては研究発表内容をもとに専攻内会議を実施して、十分な議論のもとに実施した。	研究の進捗状況に応じ、博士前期・後期課程の発表会、検討会、意見交流会を実施し、教員・院生相互の状況把握や問題点の確認などを積極的に取り組めるようにした。また専攻内の教員が院生の学習成果を個別に把握しており、研究について学会等での発表、投稿を積極的に行うように指導している。	授業の実施内容等について、少人数であるため大学院生との話し合いから進めることができた。実験・演習スペースについては、サイエンスポート 3 階に共通演習室 A, B, C を設けた。これにより、大学院生が実験や研究を行うことのできる環境を整えた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 造園学の社会的役割の再確認や専門性の深化を実施することができた。	【長所】 国際感覚および現場感覚を養うことができた。本学造園学専攻の大学院生の大きな刺激になり、交流も深めることができた。	【長所】 教員によって評価の視点が多様であり、評価が一面的とならない。	【長所】 学位授与方針により、学習成果の評価を適切に運用した。	【長所】 定期的な点検を行うことにより、専攻全体の学習状況や研究実績の状況確認が可能となった。
	【特色】 造園学のもつ広範な分野の理解とそれに基づいた専門分野の特徴を理解することができた。	【特色】 大学院生自身の専門領域の確認や妥当性の検証ができた。	【特色】 多様な視点からの厳正な評価を行うことができた。	【特色】 明瞭かつ公正な評価を行うために常に確認をした。	【特色】 大学院生からの意見等も反映させ、適切性を可能な限り保てるよう努力した。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 博士前期課程の現行カリキュラムについて、専門性と総合性のバランスを図る検討が必要である。	【問題点】 持続的な実施ができるようにする。	【問題点】 異分野の研究の場合、特に学位授与に際しては、検証が難しい場合も考えられる。	【問題点】 特になし	【問題点】 研究環境、特に実験・演習スペースのさらなる確保の検討が必要である。

	【課題】 2021 年度から開始される地域環境科学 研究科の新カリキュラムにて問題点の 解決を図る。	【課題】 年々進む国際化へ対応できるような意 識改革と実施が必要である。	【課題】 発表会、検討会、意見交流会などを通じ、 今まで以上に論文の検証を継続的に実 施することが必要と考えられる。	【課題】 より安定した明瞭かつ公正な評価の実 施を行う。	【課題】 サイエンスポートにおける実験・演習スペ ースについては、継続的な検討を行い、よ り良い研究環境の確保に努めたい。
根拠資料名	◆(1) 大学院カリキュラム◆(2) 大学院 学生便覧◆(3) 大学院シラバス◆(4) 専 攻3ポリシー	◆(5) 発表会、検討会、意見交流会実施 記録	◆(6) 専攻会議での検討を示す議事録・ 資料◆(7) 発表会、検討会、意見交流会実 施記録	◆(7) 発表会、検討会、意見交流会実施記 録◆(8) 学会等での発表、投稿実績◆(4) 専攻3ポリシー	◆(9) サイエンスポートの研究室配置

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	入試説明会や論文発表会への学部生の参加を促す一方、試験問題の開示を行い、公正に実施している。また、今年度はコロナ禍によりキャンパスに入構できない受験生を考慮し、入学試験をオンラインにより実施した。そのため、事前の入試説明会をⅠ期、Ⅱ期それぞれ複数回実施し、公正な入試の実施に努めた。	Ⅰ期およびⅡ期の2回にわたる入試時期に、その時の状況等について専攻内教員間で議論を行い、適切性について十分な議論と取り組みを行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 早い時期から大学院進学に関する情報をあたえることにより、より意欲の高い学生を確保することが可能となる。	【長所】 入試の実施に伴い必然的に検討する機会がある。
	【特色】 学部生が早い時期から大学院の専門教育の実態や研究をめざす人材を発掘することができる。	【特色】 学力のみならず面接を実施することで、応募者の学生の研究に対する意欲をより適切に評価できるようになる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 本学学内学部生の進学率も低い。これは高い学部生の就職率によるものである。	【問題点】 留学生や海外からの応募者や受験相談者について、研究能力が十分であるかなどの検証が難しいケースが見受けられた。
	【課題】 社会とのバランスをみながら、長期履修制度などを利用した社会人入学制度の案内なども積極的に行う。また学部生に対しては、大学院教育や研究の魅力を、講義などを通して積極的に行う。	【課題】 受験希望者(特に学外からの留学生受験者)に対しては、可能な限り複数回、対面式で早い時期から相談などを行い、研究能力や修学の意味確認などをより密に実施することが重要かと思われる。
根拠資料名	◆(10)入学者◆(11)大学院入試募集要項 ◆入試過去問題 HP(https://www.nodai.ac.jp/nodaigs/admission/past-test/) ◆(4)専攻3ポリシー	◆(6)専攻会議での検討を示す議事録・資料

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	専門分野ごとに、適切な人材が配置されるように定期的な会議を開き議論している。また、大学の理念・目的、研究科の教員組織の編成に基づき、専攻の教員組織の編成方針を作成し、本学のホームページ上で公開している。	学部再編(2018 年度)に伴う教員数の削減により、新規採用が厳しくなっている。大学院指導の有資格者の確保が緊急課題である。新研究室体制に向けた教員組織について議論を行った。	地域環境科学研究科の設置および新研究室体制の開始に伴い、定期的に大学院指導教授会議を開き、適切な教員配置について議論した。	国際的視野によって、本学造園学専攻の教育・研究方針をどうあるべきか、常に議論し、その方針に基づいた人員配置ができるように努め、新研究室体制における教員組織を構成した。	地域環境科学研究科の設置および新研究室体制の開始に伴い、定期的に大学院指導教授会議を開き、適切な教員配置について議論した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 複合的な専門指導体制が構築できる。	【長所】 学部における教員編制の充実化が必要である。	【長所】 教員の採用、昇格に伴う教育研究活動の展開が可能となる。	【長所】 学部において、外国人教員の採用も図るよう努め、今後の大学院教育の在り方を探った。	【長所】 自己点検結果を、学科内指導教授会議で確認した。
	【特色】 専門性の異なる人材の配置で多様な教育・研究体制を構築可能である。	【特色】 新たな教員確保に伴う大学院教育の充実を図る。	【特色】 教員の採用、昇格に伴う専攻内の教育研究活動の活性化が図られた。	【特色】 議論の末、2021 年度より新研究室体制に移行し、さらなる国際化を図る。	【特色】 議論の末、2021 年度より新研究室体制に移行し、教員組織の適切性が図られた。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 今後専攻内の教員数を十分に確保することが困難な場合が想定される。	【問題点】 今後、専攻内の十分な教員数の確保がさらに困難な場合が想定される。	【問題点】 新研究室体制の検討により指導体制が整備されつつあるが、今後専攻内の教員数を十分に確保することが難しい場合が想定される。特に造園学を修めた専門家の減少が危惧されている。	【問題点】 国内の造園の特色をどのように国際レベルで発信できるようにするのか、多くの議論が必要である。	【問題点】 学内での活動やプロジェクトの成果等の評価判定が難しい。
	【課題】 新研究室体制により、大学院指導教員の資格を有する教員確保に向けた、研究環境の充実を図る必要性がある。	【課題】 新研究室体制により、大学院指導教員の資格を有する教員確保に向けた、研究環境の充実を図ると共に、人事体制の微調整が必要であると考えられる。	【課題】 新研究室体制により、大学院指導教員の資格を有する教員確保に向けた、研究環境の充実を図ると共に、人事体制の微調整が必要であると考えられる。	【課題】 新研究室体制により、今後の学部人事の編制に際しても大学院組織と連携した人事体制を構築できるよう検討が必要である。	【課題】 新研究室体制により、従来の体制による進め方にとらわれない、新規性の高い教育方法を見いだす必要がある。
根拠資料名	◆(12)新研究室の紹介◆(13)新研究室体制	◆(13)新研究室体制◆(14)学科（専攻）教員配置表	◆(13)新研究室体制◆(14)学科（専攻）教員配置表	◆(13)新研究室体制◆(14)学科（専攻）教員配置表	◆(13)新研究室体制

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名上原 万里子

学科名・専攻名国際農業開発学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	教育課程の編成方針にしたがい、自然科学と社会科学、必修科目と選択科目、座学と実験・演習、フィールド調査などを適切に開設し、体系的に編成している。	各年度に 2 回、専攻合同の院生発表会を開催し、すべての院生が研究計画発表・中間発表・最終発表をおこなっている。本年度は ZOOM 開催した。	成績評価および単位認定は各科目の評価責任者が指導実施記録にもとづいて適切におこなっている。学位授与については、院生発表会における最終発表の後で学位論文を審査する判定会議において判定している。	院生発表会におけるプレゼンテーションと学位論文によって、院生の学習成果を適切に把握し、相応の評価を実施している。	研究科のとりくみとして前・後学期に院生による授業評価をおこない、その結果に応じて専攻としての改善計画を研究科に提出している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 自然科学系科目と社会科学系科目を必修科目とすることにより、分野横断的な教育が実現されている。	【長所】 専門分野の異なる教員や院生を前にプレゼンをおこなうことにより、自らの研究内容や研究姿勢を客観的に把握することができる。	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 他の大学院・専攻にはないマルチディシプリナリーなカリキュラムとなっている。	【特色】 専門分野の異なる教員・院生が一堂に会し、共通のテーマでディスカッションをくりひろげている。	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 多くの教員が学部学生への教育や様々な学内業務に忙殺されており、実験・演習への対応が不十分となっている。コロナ禍での追加業務が重なり、さらに困難な状況になってきている。	【問題点】 多くの教員が学部学生への教育や様々な学内業務に忙殺されており、院生発表会に参加できる時間が限られたものとなっている。コロナ禍での追加業務が重なり、さらに困難な状況になってきている。	【問題点】 各学期の授業終了から成績評価提出までの期間が短く、提出されたレポートなどを評価する時間が十分にとれない。	【問題点】 多くの教員が学部学生への教育や様々な学内業務に忙殺されており、院生と個別に対応する時間が相対的に短くなっている。コロナ禍での追加業務が重なり、さらに困難な状況になってきている。	【問題点】 本専攻は全院生のほぼ半数を留学生が占めているが、研究科の作成する授業評価では、留学生にはわかりにくい項目やミスマッチな設問が散見される。
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	◆国際農業開発学専攻 3 方針_161209 ◆大学院シラバス、	◆院生発表会実施案内	◆院生発表会実施案内 ◆論文審査・判定会議議事録	国際農業開発学専攻 3 方針_161209 院生発表会実施案内	◆授業評価アンケート、◆授業評価アンケートに対する改善計画書

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	年 2 回の入試でそれぞれ入試説明会（オンライン）を計 4 回実施するとともに、ウェブなどを利用して過去の入試問題を公開するなど、学内外からの受験者に配慮した説明をおこなっている。入試においては各専門分野からの出題と英語問題の出題など、分野横断的な教育方針に沿って筆記試験（事前課題方式）を実施している。口述試験（オンラインによる）は専攻内の全指導教員が担当し、各専門分野の観点から試問をおこなっている。また、留学生の増加に対応して筆記試験・口述試験とも日本語・英語のバイリンガルで実施している。	年 2 回の院生発表会でのプレゼンテーションで、院生の研究に対する取り組みを評価している。また個別の問題に関しては必要に応じて専攻会議でとりあげ、専攻教員間で情報共有を図るとともに、改善策を随時検討している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 2 期入試の時期が後学期の学位論文審査の時期に近接しており、入試業務にあたる一部の教員に過重な負担を強いている。	【問題点】 多くの教員が学部学生への教育や様々な学内業務に忙殺されており、さらには、コロナ対応のための業務が新たに加わり、専攻会議の開催に支障をきたしている。
	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	国際農業開発学専攻 3 方針_161209 ◆大学院入試募集要項、HP 等、◆入試過去問題公表 HP	院生発表会実施案内

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	大学の理念・目的、研究科の教員組織の編成に基づき、専攻の教員組織の編成方針を作成し、本学のホームページ上で公開している。	各専門分野(研究室)に指導教授を配置し、院生の研究指導にあたっている。授業においては指導教授に加えて授業担当教員を配置し、教育・研究活動を展開するための適切な教員組織を編成している。	大学院改組後の 2021 年度以降の人事計画が審議・決定された。教員の募集、採用、昇任等は大学の規定に沿って適切に行われている。	教員の資質向上は基本的に個人の努力に帰すべきものであり、専攻としては各教員が研究や自己研鑽に十分な時間を割けるよう、組織的かつ多面的な配慮をおこなっている。	大学院改組後の 2021 年度以降の教員組織の適切性について検討が行われている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 多くの教員が学部学生への教育や様々な学内業務に忙殺されており、全体として大学院での教育・研究活動に割ける時間が近年減少している。コロナ禍での追加業務が重なり、さらに困難な状況になってきている。	【問題点】 なし	【問題点】 多くの教員が学部学生への教育や様々な学内業務に忙殺されており、研究や自己研鑽に割ける時間が十分とれていないのが現状である。コロナ禍での追加業務が重なり、さらに困難な状況になってきている。	【問題点】 専攻において教員組織の適切性について検討をおこなっても、トップダウンによる組織改編や補職人事がしばしばあるため、実際の運営に反映することは困難である。
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	国際農業開発学専攻 3 方針_161209	◆専攻教員配置表—年齢、性別、国際性、職階を示すもの	◆専攻教員配置表—年齢、性別、国際性、職階を示すもの ◆大学院シラバス		◆大学院シラバス

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名上原 万里子

学科名・専攻名農業経済学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	農業経済学専攻では、具体的なカリキュラムポリシーとして、以下のように定めて教育課程を編成している。 （１）「農業経済学、農政学、食料経済学を基幹科目として配当し、修士論文作成のために、問題意識の醸成や研究方法・調査技術の修得が行えるよう特論および演習を必修科目として配当する」。これに対して、農業経済学、農政学、食料経済学の各特論と特論演習を配置し、大学院生はそれぞれの専門分野をセットで履修するよう指導している。 （２）「指導教授または指導准教授や論文指導教員以外の多様な研究方法や研究視点を学べるよう選択科目を配当する」。これに対し、上記の特論・特論演習科目のうち、専門以外の分野の科目を、研究計画や関心に応じて履修できるようにしている。 （３）「プレゼンテーション能力や議論の能力を高めるため、必修科目として総合演習を配当する」。これに対し、農業経済学総合演習（前期課程）および農業経済学研究総合演習（後期課程）を開設している。 （４）制度的な枠組みを学ぶため、農業法に関する科目を配当する。これに対し農業法特論Ⅰ・Ⅱを開設している。	入学時および進学時の４月にガイダンスを行い、大学院生としての心構え、必要な手続きなどを説明している。ただし、今年度は、新型コロナの影響で、専攻全体ではガイダンスを行わず、指導教員が説明した。 大学院生の論文を指導教員以外の教員の査読を経て掲載する学術雑誌『農経研究報告』を発行している。令和２年度の詳細については「包括的点検・評価報告書」を参照。 大学院生の研究室をサイエンスポート 7 階に 2 室設置していた。それぞれ学生どうしで交流が図れるようにしている。	成績評価について学生が説明を求める場合は科目担当教員が面談等を行う。 総合演習の評価及び学位認定については、専攻全教員が参加する専攻委員会で判定している。総合演習の評価および、前期課程の学位認定については 2 月 8 日、後期課程の専攻内における審査報告会は 1 月 27 日、その実施記録の承認については 2 月 8 日の各専攻委員会で行った。	農業経済学専攻では、前期課程では、食料、農業、環境の農業経済学的側面にかかわる知識、農業経済学および関連分野において、研究者、教育者あるいは専門家として活動しうる能力、図表を効果的に利用しながら文章で適格に表現して、情報発信する能力等をディプロマポリシーに掲げている。後期課程では、農業経済学の専門領域における高い専門性を保証する国際的なレベルでの高度な知識、体系的に情報を整理し、論理的思考に基づく研究能力、食料問題・農業問題・環境問題等の解決に向け、リーダーシップ能力等を掲げている。これにもとづき、前期課程については、修士論文の中間報告会を 3 回、最終報告会を 1 回開催している。後期課程については、博士論文の中間報告会を 3 回、最終公開報告会を 1 回開催している。このなかで、指導教員以外の教員から、多角的にアドバイスを得ながら、必要な知識・能力・態度を身につけられるようにしている。さらに後期課程の最終学年においては、副査予定者が博士論文の研究指導者となり、上記の項目水準を満たせるよう指導体制を整えている。	学生に対するアンケートに基づき、点検・評価を行うとともに、改善計画を立てて、向上を図っている。

2020（令和 2）年度 基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式 1

現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 農業経済学に関連した幅広い分野を学ぶことができる。	【長所】 1 科目あたりの受講生が少ないので、受講生に合わせてきめ細かな授業を行っている。	【長所】 総合演習の評価・学位認定については、合議に基づいており公平である。	【長所】 なし	【長所】 少人数で学生一人ひとりに応じた指導が可能となっており、比較的学生の満足度が高くなっている。
	【特色】 なし	【特色】 受講生に合わせて、英語または英語・日本語のバイリンガルでも授業を行っている。	【特色】 日本語のほか、英語での修士論文・博士論文の提出を認めている。	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 新カリキュラムが再編後の研究室体制とうまく連動できていない。	【問題点】 農経研究報告は、対外的な評価を得にくいことから、他の学会誌を利用することとし、休刊する	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 新カリキュラムの運用がスムーズにいくよう周知する。また、2023 年度カリキュラム変更へ向け、2021 年秋頃の申請に向けて検討を進める。	【課題】 農経研究報告休刊の影響を、良い方向へと向ける必要がある。	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	カリキュラムポリシー シラバス 専攻委員会配付資料（今後の指導体制、カリキュラム、入試科目について）	なし	判定根拠資料	判定根拠資料	教育評価の結果を踏まえた課題の抽出と改善計画書

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （ ☒ を記入）	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	農業経済学専攻博士前期課程では、具体的なアドミッションポリシーとして、経済学に関する基本的な学力、専門領域における知識や研究方法の基本的な学力、日本人は英語、外国人は日本語の基本的な語学力、食料問題、農業問題、環境問題に強い関心を持ち、社会科学の方法によって問題解決に貢献しようとする強い意欲を求めている。これに対し、前期課程の学力試験については、基礎的科目・専門科目として、経済学・農業経済学・農政学・食料経済学から2科目を選択、語学については英語又は日本語から選択できるようにし、外国人留学生の場合も第一言語が英語以外の場合は、英語又は日本語から選択可能としている。また、専攻の全教員が参加する口頭試問で受験生の意欲を判断している。後期課程については、専門領域における知識や研究方法、第二言語として英語または日本語のより高度な運用能力、研究資料を得るためにコミュニケーション能力を有するとともに、それらを緻密に整理できる能力、食料問題、農業問題、環境問題に強い関心を持ち、社会科学の方法によって率先して問題解決に貢献しようとする強い意欲を求めている。これに対し、学力試験については、専門科目として、農業経済学・農政学・食料経済学から1科目を選択、語学については英語又は日本語から選択できるようにし、外国人留学生の場合も第一言語が英語以外の場合は、英語又は日本語から選択可能としている。また、専攻の全教員が参加する口頭試問で受験生の意欲のみならず、修士論文等の作成状況などを問うことで、受験生の能力を判断している。 学生募集については年2回説明会を開催し、アドミッション・ポリシーを用いながら、とくに外部からの進学希望者については丁寧に説明している。 個別の学力試験の採点結果は複数の教員が確認するとともに、専攻委員会で公正に選抜している。 専門科目の、科目、出題方法については、すでに検討を始めており、2022年度入試から変更する予定。	専攻委員会で入試科目やアドミッションポリシーの適切性について点検・評価を行い、数年に1回の割で改善を図っている。ただし、当面、変更の予定は無い。 現在、学生の在籍者数は定員を満たしていないが、反面きめ細かい指導が可能となっている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 留学生や社会人の受験希望者が比較的多い。	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 受験生の数が定員よりは少ないが、ある程度は確保し、安定している。	【問題点】 なし
	【課題】 内部進学者を増やすために、学部のゼミや研究室を通じて、大学院進学 of 具体的なイメージを持ってもらうことが必要である。すでに資料は配付した。	【課題】
根拠資料名	試験問題及び解答用紙 試験実施要領 入試説明会資料	

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	教員組織の編制として、下記のような方針を定めている。 本専攻は以下の要件を満たす教員で組織する。編制にあたっては、農学研究科の教員組織の編制方針を踏まえるとともに、農業・食料・環境の諸問題に対して経済学をはじめとした社会科学の手法を用いて多様な研究・教育を展開しうる研究室体制と社会科学の特性を踏まえた教育体制を構築し、その維持・向上に努める。 1. 法令（大学院設置基準等）で定められている要件を満たす教員 2. 本専攻の「教育研究上の目的」、「教育目標」及び「3つの方針」を十分理解し、それらに対応する能力と意欲を備えている教員 3. 農業経済学や関連社会科学分野における高い研究業績を有するとともに、本専攻の構成員として各種運営業務に積極的に取り組める教員	農業経済学専攻は、学科再編に伴い、食料環境経済学科と国際食農科学科に所属する教員で構成している。食料環境経済学科の6研究室および国際食農科学科の2研究室を編成し、各研究室原則として3名の教員で構成されている。令和2年度は、指導教授13名、授業担当教員6名となっており、男性16名、女性3名である。 国際食料農業科学研究科では、食料環境経済学科の6研究室体制となる。また、2020年度から、研究室の体制を再編した。現在欠員になっている研究室があるため、令和3年度に向けて、早めに食料環境経済学科と連携して公募を開始し、教員の授業などの負担の軽減を図るとともに、指導体制の充実を図っている。	新規教員の募集・採用については、食料環境経済学科と一体的に行っている。募集はすべて公募によって行い、本学および科学技術振興機構のホームページ等で公募情報を公表している。採用・承認については、大学の基準に従い、専攻委員会で審議を経て公平かつ適切に行っている。	各研究室の中で指導教授などが新任教員や若手教員にアドバイスをを行い、資質向上を図っている。また、全学的に行っているFDフォーラム、公的資金の利用管理に関する講習会、ハラスメント講習会などに各教員は参加し、資質向上を図っている。	教員の研究室体制については、時代の変化や研究・教育上の効果を鑑みて、数年に一度、関係教員全員で検討を行い、研究室の再編を行ってきた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし	【長所】 教員の専門、学生・院生のニーズ、社会的ニーズに合わせ、研究室体制を再編した。	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 教員の専門、学生・院生のニーズ、社会的ニーズに合わせ、研究室体制を再編した。
	【特色】 なし	【特色】 新しい研究室体制と、特論科目、試験科目、が連動していない。そのため、カリキュラムや試験科目、複数指導体制の運用について、検討を開始した。	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 新しい研究室体制と、特論科目、試験科目、が連動していない。そのため、カリキュラムや試験科目、複数指導体制の運用について、検討を開始した。

現状説明を踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 検討結果を、具体的な申請書へと整理・集約する必要がある。	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 検討結果を、具体的な申請書へと整理・集約する必要がある。
根拠資料名	大学院案内	専攻委員会配布資料（今後の指導体制、カリキュラム、入試科目について）			専攻委員会配布資料（今後の指導体制、カリキュラム、入試科目について）

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名上原 万里子

学科名・専攻名国際バイオビジネス学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	国内外の食・農・環境ビジネスに関する専門科目を配置している。 講義内容のシラバスへの反映、15 回開講の確実な実施している。 休講時の補講を適切に実施している。 最先端研究の知識などを得るため、不定期に外部講師による講義を実施している。	調査・研究能力の向上を図るため、学期ごとに調査研究成果報告会を実施している。 柱科目の演習を必修科目として設置し、きめ細やかに指導している。 柱科目の演習では論文指導のみならず 対外発表の指導も行っている。	成績評価と単位認定は、農学研究科の評価基準に従って行っている。 学位授与は、原則として全教員が参加する学位論文報告会を開催し、絶対評価に基づく審査および完成論文審査により行っている。 中間発表会（プレゼンテーション）を実施している。	専攻主任、主事がシラバスチェックを行い DP の整合性をチェックしている。 各学期において、指導教員が学生の取得単位数と成績内容を把握している。 調査研究成果報告会を通じて、個々の学生の総合的な研究能力を把握している。 指導教授が就職相談を実施している。	新研究科のもとで新専攻の教育体系を継承・向上・改善するための科目・授業内容について個々に検討を行なった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 食・農・環境ビジネスの理解やその調査・研究に必要な知識や能力が身につく。	【長所】 調査・研究能力の向上に加え、プレゼンテーション能力が身につく。	【長所】 成績評価、単位認定及び学位授与の客観性が保たれている。	【長所】 調査研究成果報告会での学生評価は、総合的な研究能力を把握する上で重要である。	【長所】 新研究科への移行を契機に、教育課程の改革を総合的に進めることができる。
	【特色】 ゼミ形式による少人数教育で、個々の大学院生に応じたきめ細やかな教育を行っている。	【特色】 日本語のみならず英語での報告・質疑応答もあり、国際性の向上に寄与している。	【特色】 全員の論文、報告内容、発表について点数化し、その結果をもとに成果を評価している。	【特色】 特になし。	【特色】 教員配置とカリキュラム、教育計画などを長期的視野のもと点検・評価し検討できる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 コロナ災禍のため遠隔授業にて実施した科目があった。	【問題点】 コロナ災禍のため中間報告会は遠隔で実施した。	【問題点】 コロナ災禍のため中間報告会、最終報告会は遠隔で実施した。	【問題点】 コロナ災禍のため遠隔にて指導した期間があった。	【問題点】 特になし。
	【課題】 特になし。	【課題】 全学的なポスター発表会への積極参加について継続して検討する。	【課題】 特になし。	【課題】 国内・国外の会議における研究発表を推奨するよう指導する。	【課題】 特になし。
根拠資料名	◆大学院カリキュラム、◆大学院学生便覧、◆大学院シラバス、専攻会議資料、◆専攻 3 ポリシー	中間発表会資料	中間報告の評価、中間発表会資料（個人が特定できるため部外秘）◆成績評価基準、◆学位論文審査基準	◆専攻 3 ポリシー	専攻会議資料

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に 対する 現状説明	学生募集や入試にかかわる情報は Web ページにおいて公開しており、全受験者に公正に提供している。また、願書提出方法や奨学金情報にかかわる詳しい説明、さらには個々の志願者の質問への回答などのため、願書提出前に専攻単位の入試説明会を定期的に開催し、学生募集・入学者選抜における公平性を担保するための取り組みを実施している。 入試過去問題の公表、入試問題作成の内規の整備、口頭試験内容の標準化を専攻独自にルール化し、公正な入学者選抜に努めている。 海外現地入試など多様な入試を検討している。	ABE イニシアティブ、特別留学生など留学生の受け入れを積極的に行っている。 学生の適性について、個々の学生の評価・適性を専攻内で共有し、定期開催する報告会にて相互に点検・評価し、問題点の把握と改善を検討している。 一般入試のみならず、国際協力経験者入試、社会人入試、秋入学など多様な入試制度の受け入れを行っている。 留学生を中心に、学外の奨学金獲得に向け、応募書類作成の支援や推薦書作成を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 指導教授との進路相談などを通じて、研究計画策定など入学希望者の事前準備を重視している。	【長所】 個々の学生と緊密に連携し学生受け入れの改善に努めている。
	【特色】 博士前期課程入試においては英語の試験を TOEIC に置き換えるなどし、公正な入試選抜を行っている。ただし、令和 2 年度は TOEIC が実施されなかったため、英語試験を別途実施した。	【特色】 学生指導では、指導教員と指導補助教員からなる複数教員による教育指導態勢を採用している。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 特になし。	【問題点】 日本人学生の大学院進学が低いことから大学院志願者数が減少傾向にある。
	【課題】 推薦入試導入の検討が必要である。	【課題】 日本人学生の進学を促すため、学部授業において大学院進学をアピールすることが必要。 学外奨学金を積極的に獲得するよう指導する。
根拠資料名	専攻会議資料、◆大学院入試募集要項、HP 等、◆入試過去問題公表 HP、◆専攻 3 ポリシー	専攻会議資料、中間報告会資料、奨学金推薦資料（個人情報のため部外秘）

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	指導教授による専攻委員会を不定期に開催し、指導教授推薦など教員組織編制の方針を確認し必要に応じて改善している。 学科や学部で教員募集を行った場合、常に大学院担当について意識しながら専攻人事の方針を決定している。	学部改組に伴い教員数が減少するなか、柱科目を中心に専任教員を配置し、不足を非常勤講師で補うなど適切に編制している。 研究室単位でバランスの取れた年齢構成に心がけている。 教員の授業負担に配慮しながら時間割編成するよう努めている。	教員の昇任は専攻会議にてはかり、指導教授により構成される専攻委員会にて適切に審議している。	研究室単位で合同ゼミを行うなど、若手教員の FD 向上がみられる。 専攻独自に FD 研修会などは開催していないが、積極的に学内の FD 講習会に参加している。 授業評価アンケートに取り組むよう、学生指導している。	教員の研究業績、社会活動について研究室ごとに点検・評価することを奨励している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 教員組織の編成方針に基づき、英語で指導できる教員数が増えた。	【長所】 専任教員が減少しているが、継続して多彩な科目を提供している。	【長所】 研究室ごとに指導教授が存在し、研究室ごとに募集・採用・昇任を検討できる。	【長所】 特になし。	【長所】 特になし。
	【特色】 英語で研究指導するなど、国際性が向上した。	【特色】 英語で指導可能な教員配置を意識している。	【特色】 特になし。	【特色】 特になし。	【特色】 特になし。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 特になし。	【問題点】 すべての研究室が英語で指導しておらず、留学生の研究室選択に偏りがある。	【問題点】 特になし。	【問題点】 特になし。	【問題点】 特になし。
	【課題】 特になし。	【課題】 研究室全体での研究・教育・指導を念頭に した教員配置計画を策定する。	【課題】 学位未取得の教員がいるため、学位取得 を促す必要がある。	【課題】 特になし。	【課題】 若手教員の研究力向上のため、海外依 命留学を計画する。
根拠資料名	専攻教員配置表 大学院教員名簿、学生便覧、HP 等	専攻教員配置表 大学院教員名簿、学生便覧、HP 等	専攻教員配置表、学生便覧、HP 等	専攻会議資料 （合同ゼミ実施実績については、1 研究室 が毎週 1 回実施した、コロナ災禍のため FD 研修会参加者はいなかった）	専攻会議資料

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名上原 万里子

学科名・専攻名環境共生学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	生物学，資源学および地域学を基礎とし総合的・複合的科目を通して，学位授与のための教育課程を編成し，各指導教授が研究手法を通じて研究発表能力および学位論文執筆等を体得できるように教育している．	定期的に行われる専攻会議において，各指導教授から，院生の研究進捗状況の報告を実施してもらい共通認識をするとともに，問題がある場合，教員相互で意見交換を行い、対策を立てている．	指導教授による院生への研究・教育指導を密に実施し，在籍 3 年目には，学位授与ができる体制を整えている．2020 年度は，コロナ禍により 3 年生 7 名院生のなかで 5 名の研究が停滞し，学位申請ができないケースがあった．	自然・社会・人文科学を基礎とした総合科学分野の高いレベルでの研究能力を備え，環境共生型社会の実現のために社会貢献できるような研究に対して学位授与ができるよう実施している．	専攻会議および各専攻教員が定期的に点検・評価をし，改善・向上に務めている．
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 多様な専門を有する社会人院生が在籍するため自然・社会・人文科学が融合した総合科学分野からの視点で研究ができる．	【長所】 なし	【長所】 社会人院生に対しては，授業以外の場面でも，指導教授が指導体制を強化し，研究発表および学位論文作成の指導をし，成果を上げた．	【長所】 年 2 回のスクーリング授業を通して，院生相互の研究，教員の講演などにより学位授与方針に則った体制を整えている．	【長所】 なし
	【特色】 環境共生に関する総合的・複合的な視野をもち高度な研究能力を有する人材を養成できる．	【特色】 なし	【特色】 年 2 回スクーリングによる研究発表会を実施しているため，専攻全体の教員が常に院生の研究情報を把握し，多角的に助言できる．	【特色】 本専攻の教員は，自然・社会・人文科学の多方面から優れた教員が集まっており，院生に対して様々な角度から研究指導ができる．	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 社会人院生が多く在籍するため，指導教授との相談は密に行われているが，院生同士の研究交流の機会を多くする．	【問題点】 なし	【問題点】 2020 年度は，コロナ禍により、学校現場での実践研究が実施できず，学位申請ができないケースがあり，留年となった．	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 指導教授および院生全員による研究発表スクーリング等の機会を増やし，研究交流を密にする．	【課題】 現状の継続	【課題】 2020 年度に留年した院生については，次年度学位取得に向け，指導教授を中心に専攻全体でバックアップしている．	【課題】 現状の継続	【課題】 現状の継続
根拠資料名	専攻会議議事録，授業実施評価報告書，スクーリング研究発表会抄録，◆専攻 3P	専攻会議議事録，授業実施評価報告書	専攻会議議事録，授業実施評価報告書 研究発表会抄録	専攻会議議事録，授業実施評価報告書 研究発表会抄録，学位審査報告・実施記録、◆専攻 3 ポリシー	専攻会議議事録，授業実施評価報告書 研究発表会抄録

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	大学全体で発信している募集情報だけでなく、専攻独自特色あるホームページから、とくに社会で活躍している経験と知恵と研究力を学位取得につなげる指導体制を整えていることを PR し、社会人特別選抜という入試制度を活用して、働きながら 3 年間で学位取得できることを実施してきた。さらに、仕事の関係で 3 年間では取得ができない院生には、入学当初から長期履修制度により対応できるように体制を整えており、順調に実施している。 しかし、本専攻は 2021 年度より募集停止となり、今年度の入学者選抜は行っておらず、該当しない。	定期的に行っている専攻会議において、常に院生確保について教員相互で情報交換を行い、入学希望者に対して、事前に、研究体制として専攻内での研究指導教員の紹介と研究の方向性を指導した上で、入学試験が受験できるようなシステムを構築している。また、指導教授の他に、補助的に専門性をもつ他専攻の教員の指導も協力する体制を整備し、適切に学生が受け入れている。その結果、2020 年度の院生数は定員を確保している。しかし、2021 年度より募集停止となった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし	【長所】 定期的に行われる専攻会議において、毎回、院生確保について教員相互で広く情報交換をしている。入学希望院生には、入試事前に、研究指導を行い研究の方向性を明示し、入試合格後、スムーズな研究体制、学位取得ができるように指導体制を確立化している。
	【特色】 なし	【特色】 入学前、事前に綿密な相談・研究計画の指導をしているため、スムーズに大学院在籍中の研究活動が実施できる。2020 年度は、入学者が 2 名おり全体で 14 名の院生が在籍し、本専攻において学位取得を希望するニーズが高い。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 2021 年度以降、本専攻は募集停止となった。そのため、学生の受け入れはなくなる。現在在籍する院生の研究充実、指導が必要である。
	【課題】 なし	【課題】 現在在籍する全院生の 3 年間または 4 年間（長期履修生）での学位取得に向けた学位論文指導のさらなる充実が必要である。
根拠資料名	なし	専攻会議議事録、授業評価アンケートおよび改善計画書

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	本専攻は、自然科学・社会科学・人文科学と広い研究分野の院生を指導する体制を整備するため多方面の教員を配置している。しかし、退職者等の補充をため、現在の生物・資源・地域学の各分野の教員確保に苦慮している。 また、大学の理念・目的、研究科の教員組織の編成に基づき、専攻の教員組織の編成方針を作成し、本学のホームページ上で公開している。	本専攻における自然科学・社会科学・人文科学のバランス良い指導体制を確保するため、教員の研究分野の見直しを行い、分野配置の再編成をおこなった。	2020 年度は、専攻内教員で指導教授の資格を持っていない教員について、昇格の要請・依頼を検討し、業績の積み上げ等努力を促した。	専攻主任から、指導補助教員・授業担当教員には、常に研究業績をつくることを助言し、指導教授・指導補助教員を確保することに努力している。専攻内において、教員および院生に向けて年 2 回研究講演会を実施し、教員の研究充実をはかっている。	定期的な専攻会議において、専攻内組織について検討している。今後の退職教員に対する研究指導体制の見直し等も行った。とくに、2019 年度退職した指導教員がおり、その教員が指導する院生の留年に伴い、指導教員の変更を実施し、2020 年度学位取得がスムーズにできるよう配慮した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 院生の研究内容について、多方面から他の指導教授からのアドバイスが可能である。	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 自然・社会・人文科学の広い分野での指導教員の受け入れが可能であること。	【長所】 なし
	【特色】 環境共生学の分野において、広く自然・社会・人文と多方面で指導できる。	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 地域学分野の教員が 1 名で不足しており、学位論文審査のために補充が必要である。	【問題点】 なし	【問題点】 授業担当の若手の教員が少ない傾向にあり、今後の指導体制で人員不足に苦慮する。	【問題点】 様々な環境共生学の研究分野に対応できる教員確保が困難な状況である。	【問題点】 なし
	【課題】 学内および学外からの環境共生学に関する研究指導できる教員を確保し、バランスの良い指導体制を確保する。	【課題】 なし	【課題】 現専攻内教員の指導教授昇格を促進し、今後の指導体制を確保する。	【課題】 専攻内教員において指導充実体制を作っていく。	【課題】 なし
根拠資料名	専攻会議議事録，大学院教員名簿，◆ 専攻の教員編成方針	専攻会議議事録，大学院教員名簿	専攻会議議事録，大学院教員名簿	専攻会議議事録，研究講演会抄録	専攻会議議事録

学部・研究科名 農学研究科
学部長・研究科委員長名 上原 万里子
学科名・専攻名 農学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	学部との教育連携方法の検討		
実行サイクル	5 年サイクル（平成 29 年～令和 3 年）	_____年サイクル（平成 年～ 年）	_____年サイクル（平成 年～ 年）
実施 スケジュール	大学院授業科目について、学部での関連授業科目との連続性を意識した授業内容の実施を検討するとともに、シラバスにおいてそのことを具体的に表現した記述を行う。		
目標達成を測定する指標	毎年のシラバスの改定に際して順次学部と授業との連続性を意識した表記を心掛ける。		
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	コロナ禍の影響によりオンデマンド、Zoom 利用の授業形式での学部での講義内容の変更が多く、学部との関連性を深めるには至らなかった。次年度以降の課題とする。		
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・シラバス改訂により学部学生が専門分野に関する知識技術の積み上げを具体的にみられるようになり、学部段階から徐々にステップアップさせ、大学院進学に際しての障壁を低く感じられるようになる。	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・学部との連携により、より多くの院生が 6 年一貫的教育を受けることが可能となる。	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・コロナ禍の影響が強く、専攻内での協議も不足した 1 年間だった。	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・漸く教員も新たな講義形式に慣れてきたので、その中でのさらなる質の向上を図る必要がある。	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名			

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	博士研究員制度の導入検討		
実行サイクル	5 年サイクル（平成 29 年～令和 3 年）	_____年サイクル（平成 年～ 年）	_____年サイクル（平成 年～ 年）
実施 スケジュール	博士課程進学者を増加させるとともに、それに付随して課程修了者の中から順次博士研究員を確保する。また外部の適格者についても採用できるように検討する。		
目標達成を測定する指標	専攻内のいずれかの研究室（できれば複数）に博士研究員が在籍する。		
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	好景気動向により博士後期課程進学者が減っており、定員枠を満たすことが出来ておらず、さらにその後の博士研究員はさらに難しくなっている。		
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・特定の専門分野について最新の知見や技術を有している者が研究教育に関与することにより、大学院や学部における研究教育レベルの向上が図れる。また比較的中長期的な研究にも対応できる。	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・博士研究員が大学院や学部レベルにおいて高度な教育研究指導を行うことにより、自身のキャリアアップを図ることができる。	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・博士前期課程から後期課程への進学者がさらに減ってきている。	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・年次変動があるにしても、博士後期課程への進学者を増やすための経済的サポートを含めた方策を考える必要がある。	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名			

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	連続して入学定員以上の入学者を確保する。	大学院生複数指導体制の確立	
実行サイクル	3 年サイクル（令和2年～ 4年）	3 年サイクル（令和2年～ 4年）	年サイクル（平成 年～ 年）
実施 スケジュール	入学試験の種類には推薦，一般（Ⅰ期およびⅡ期）があるが，個々の入試の枠にはとらわれず，全体を通して入学定員枠以上の入学者を獲得できたかどうかを検証する。	令和2年度から開始される大学院生複数指導体制に対応するための専攻内での体制づくり、およびその運用方法を各年度の結果を検証しながら確立する。	
目標達成を測定する指標	個々の実施年度における入学者数が少なくとも3年間連続して入学定員以上となること。	学部改組後の大学院改組により指導教員の構成も変化するが、3年間のうちに学生指導における問題や課題の洗い出しを行い、適切な指導体積を確立すること。	
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	コロナ禍対策として定員枠以上の合格者を出した。一部入学辞退があったものの者もあり博士前期課程は定員枠14名に対し、17名の入学となった。後期課程進学者は2名にとどまった。以前から問題となっている受験者の英語能力の低下が続いている。非常に意欲があっても最低限の英語能力が無いと研究活動は難しく、受験前からの指導が必要であろう。	大学院の複数指導体制および学位審査方法の明確化について、初年度ではあったが実施できた。博士後期課程は、5名中1名は満期退学となったが、残りの4名は期限内に博士論文を提出して審査に合格し博士の学位を取得した。	
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・定員枠を確保し多くの院生が在籍することで、専攻内の交流を通して異分野の研究を含めた理解が深まる。	【長所】 ・複数指導体制により、学生に対する評価が多面的となり、また指導学生への公平性や学生の安心感が高まる。	【長所】 ・
	【特色】 ・多くが本学学部からの進学であり、長期的なテーマにより研究を継続でき、幅広く当該テーマの研究を進められる。	【特色】 ・研究指導と学位審査の責任を明確にし、分けて行うこと、さらに点数化を実施することで学位審査の基準が明確になる。	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・定員枠の確保は極めて重要な課題ではあるが、そのことにこだわるあまり不適格者を入学させ、結果的に中退となった者もあり、入学者選抜は慎重に行われるべきである。	【問題点】 ・農学専攻は1研究室が1学会対応であり、研究テーマが多岐にわたるため複数指導体制を組む教員の適性を確保することが他専攻に比べ容易ではない。	【問題点】 ・
	【課題】 大学院に進学し、さらなる教育研究の指導を受けることによって、学部卒業レベルでは到達できないより魅力的な進路を得ることができる事例をしっかりと示せるように、教育研究だけでなくキャリア教育を行う必要がある。	【課題】 ・滑り出しの年度としては概ね上手く実施できたと考えているが、今後継続していく中で問題点を洗い出し、より良いものにしていく必要がある。	【課題】 ・
根拠資料名			

学部・研究科名 農学研究科

学部長・研究科委員長名 上原 万里子

学科名・専攻名 畜産学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①	②
目 標	大学・大学院連携教育の検討	大学院生と専攻教員の相互コミュニケーションの継続
実行サイクル	3 年サイクル（令和 2 年～ 4 年度）	3 年サイクル（令和 2 年～ 4 年度）
実施 スケジュール	大学院Ⅰ期入試合格者に対する後学期大学院講義の受講を検討する	半年に1回の頻度で、畜産学専攻全体での研究進捗プレゼンテーションの機会を設定する。専攻の教員全体で大学院生の研究の進展および生活状況を把握する。 令和2年7月 前期大学院研究進捗発表会 令和3年1月 後期大学院研究進捗発表会
目標達成を測定する指標	学部学生の大学院講義聴講者数	・畜産学専攻所属の大学院生および教員参加数（目標：30名） ・学部学生参加数（目標：12名）
自己評価 （☑を記入）	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	大学院Ⅰ期入試はcovid19の影響でオンライン入試となり、時期もR2年9月5日と遅れたが、前期課程13名が合格した。しかしR3年3月現在このうち3名が入学辞退した。大学院の講義自体がリモートとなったこともあり、学部生に大学院講義を受講させることを検討するに至っていないが、外部講師を招いての大学院特別講義については学部生の参加が確認された。	covid19により、前期の発表会は開催できず、後期はリモート開催としたため、教員と院生とのコミュニケーションは限定的となった。また、学部生の積極的参加も認められなかった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・Ⅰ期試験合格者の大学院進学モチベーションが維持できる	【長所】 ・メールによる質疑を行ったため、内容の保存が可能である
	【特色】 ・大学院入学後の講義受講時間を修論、就職活動などに振り替えることができる	【特色】 ・リモートによる発表の表現力を培うことができる
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・covid19の終息の見通しが立たない中での卒業論文作成と大学院講義受講との両立	【問題点】 ・対面でないため、接触する教員が限定され、専門外の院生相互のコミュニケーションも十分できない
	【課題】 ・合格者に対する大学院講義の受講啓発	【課題】 ・リモートであっても、より多数の教員、学生に参加を促す
根拠資料名	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料 ◆専攻説明会実施記録 ◆合否判定会議事録 ◆学会発表・専攻ポスター発表記録 ◆専攻ポスター発表記録-2 ◆大学院特別講義記録	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料 ◆学会発表・専攻ポスター発表記録 ◆専攻ポスター発表記録-2

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	大学院生の研究レベル高位平準化		
実行サイクル	____ 3 ____ 年サイクル（令和 2 年～ 4 年度）	____ 年サイクル（平成 年～ 年）	____ 年サイクル（平成 年～ 年）
実施 スケジュール	半年に1回の頻度で、専攻全体での研究進捗発表会の機会を設定する。専攻の教員全体で大学院生の研究の進展および内容を議論することで、学生の研究レベルの向上や改善が可能になる。 令和2年7月 前期大学院研究進捗発表会 令和3年1月 後期大学院研究進捗発表会		
目標達成を測定する指標	・畜産学専攻所属の大学院生および教員参加数（目標：30名） ・学部学生参加数（目標：12名）		
自己評価 （☑を記入）	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	専攻主催の大学院研究進捗発表会は前期は開催できず、後期はリモート開催となったが発表対象者全員が参加した。さらに各研究室が各種学会へのリモート参加に積極的に取り組み、博士前期課程で7名9題、博士後期課程で3名3題の発表を行った。		
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・学生自身に定期的、客観的に研究進捗状況を確認させる	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・指導教員以外の教員による評価、研究室以外の院生の研究状況の把握ができる	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・研究成果の学外への発信、評価	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料 ◆学会発表・専攻ポスター発表記録 ◆専攻ポスター発表記録-2 ◆大学院特別講義記録 ◆修士論文審査会 ◆博士論文審査会		

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	大学院博士前期課程進学率の向上を目指した推薦入試制度の再導入 および定着	博士後期課程進学者の獲得	
実行サイクル	____ 3 ____ 年サイクル（令和 2 年～ 4 年度）	____ 3 ____ 年サイクル（令和 2 年～ 4 年度）	_____ 年サイクル（平成 年～ 年）
実施 スケジュール	令和 5 年度入試(4 年度実施)での導入を目指して、研究室所属学部 3 年次学生に対し各研究室が年度内の早期の適正判断を行うよう工夫 する	畜産学専攻博士後期課程に進学する大学院生を積極的に獲得し、将来の 大学教員候補を育成する。特に、各研究室における活動の中で専攻教員 が大学院生と密なコミュニケーションを取り、博士後期課程の情報など を積極的に提供する。 令和 2 年 6 月および 12 月 大学院進学説明会実施	
目標達成を測 定する指標	推薦入試制度を利用した畜産学専攻への大学院進学者数 （目標：大学院入学定員数の充足）	博士後期課程進学者数	
自己評価 (☒)を記入)	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	covid19 により学部 3 年生の研究室滞在時間が激減し、教員と学生の 関係が希薄になっている。教員による学生の適性評価や、大学院進学 への動機付けが困難になっている。	I 期試験、II 期試験においてそれぞれ後期課程内部受験者 1 名ずつ、合計 2 名合格	
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・特になし	【長所】 ・特になし	【長所】 ・
	【特色】 ・有望な学生を安定して確保できる	【特色】 ・学部出身者が後期課程まで進学し農大の学位を得ることで将来の大学 教員を確保できる	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・大学院指導教員による学部学生の早期の適性判断が困難である。ま た R3 年度入試では I 期前期課程合格者から複数の入学辞退がみら れ、試験時期がさらに早期の推薦入試では、入学手続きまで合格者の モチベーション維持が問題となる	【問題点】 ・受験生の分野の偏り	【問題点】 ・
	【課題】 ・学生の負担とならない程度の頻繁なコミュニケーション	【課題】 ・就職先の確保	【課題】 ・
根拠資料名	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料	◆専攻説明会実施記録 ◆合否判定会議議事録	

学部・研究科名 農学研究科
学部長・研究科委員長名 上原 万里子
学科名・専攻名 バイオセラピー学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①
目 標	社会の現場で知的リーダーとして活躍する人材の育成
実行サイクル	__2__年サイクル（令和 元 年～ 2 年）
実施 スケジュール	プレゼンテーションおよびコミュニケーション能力を磨くため 各研究室における論文紹介、研究発表の場でのプレゼンと聴講 毎月定期的に実施される大学院セミナーでの研究紹介と質疑応答 学科教員によるセミナー開催 年に1度実施される研究中間発表会または修士論文発表会
目標達成を測定する 指標	毎年度末に実施する大学院生へのアンケート（専攻独自の調査） 専攻内会議における専攻教員へのヒアリングとその議事録
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	学生のプレゼンテーションおよびコミュニケーション能力を高めるために大学院セミナー（学生担当）を実施する予定であったが、コロナのために形式を変更し、各研究室単位でセミナーを随時実施した。 博士前期学生は研究中間報告会を後期2月にコロナ対策を考えたうえで口頭発表を実施し、バイオセラピー学専攻の理念に沿った研究を実施しているかを検討し、各学生に研究理念を明確にするように指導した。 博士後期学生1年生についても同様に2月に実施し、現状の問題点と研究の将来性について指導教授および学科教員との討論を交えて話し合うことができた 修士論文発表会を実施し、全員の研究成果について積極的な質疑応答ができた。博士論文発表会を実施し、バイオセラピー学にふさわしい研究成果を上げることができた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 学生に発表の場を提供することは、研究を遂行する上で極めて重要であり、各自の研究の立ち位置を理解させる機会になる。発表はオンラインで参加できる形式を取り、他専攻の教員の参加があり、有意義な質問と助言を得ることができた。
	【特色】 指導教授との綿密な打ち合わせが必要になり、研究の進捗状況が学生と教員間で深めることができる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 本年度は全体で集まってのセミナーの開催が困難であった。
	【課題】 学生の研究に対する問題意識を高めるためにどのような教育・指導が必要かを検討する必要がある。
根拠資料名	◆中間発表会実施記録（資料1-1）、◆修士論文発表会記録（資料2-1）

2. 研究に関する総合的事項

	①
目 標	バイオセラピー学専攻で展開される研究の相互理解を図る
実行サイクル	1 年サイクル（令和 2 年～ 年）
実施 スケジュール	毎月定期的に大学院セミナーを実施する。専攻の全教員、全院生が一堂に会し各回の担当院生が各自の研究について発表し、科学的議論による研究の相互理解を図る。
目標達成を測定する指標	専攻内会議における専攻教員へのヒアリングとその議事録
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	コロナにより専攻全体でのセミナーが実施できなかった。そのため各研究室単位で学生によるセミナーの実施を進めることを推進し、修士論文中間発表および最終発表はコロナ感染対策を十分に行ったうえで対面による口頭発表を実施した。質疑応答を丁寧を実施し、特に中間発表会では現状の問題点を指摘し、バイオセラピー学専攻の理念を共通認識することを行った。最終発表ではオンラインでの参加を積極的に行い、他専攻からの質問などがあり、充実した発表会を実施することができた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 教員と学生間で研究の把握が進んだ。
	【特色】 発表する機会により、各自の研究状況を把握することができる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 コロナにより全体でのセミナーの実施ができなかった。
	【課題】 多研究室の学生と教員の意見を聞く機会が少なかった。
根拠資料名	◆中間発表会要旨（資料 1-1）、◆修士論文発表会要旨（資料 2-2）

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	専攻の教育研究の宣伝による大学院進学者の充実
実行サイクル	1 年サイクル（令和 元 年～ 年）
実施 スケジュール	学部学生が一堂に会する機会を利用して大学院教育の意義と魅力を説明する 大学院セミナー、中間発表会、修士・博士論文発表会の周知と積極的参加の呼びかけ
目標達成を測定する指 標	大学院セミナー、中間発表会、修士・博士論文発表会の学部生の出席者数 大学院進学者数の増減
自己評価 (☑を記入)	達成した ■ 一部達成した □ 達成できず要継続 □ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	コロナにより研究室によるセミナーの実施を余儀なくされたため、中間発表会および修士論文発表会是对面による口頭発表を行わない、オンラインで学部学生の参加を喚起した。またオンラインでの入試説明会を前期、後期に実施した。学外からの説明会への参加があった。 今年度の大学院入試の結果はⅠ期入試受験者前期課程 17 名（学外 4 名）・後期課程 1 名（合格者：前期課程 9 名、後期課程 1 名）、Ⅱ期入試受験者前期課程 5 名（学外 2 名）・後期課程 1 名（合格者：前期課程 5 名、後期課程 1 名）であった
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 口頭による中間発表により、学生に研究の内容を伝える重要性を理解させ、バイオセラピー学専攻の理念を深めることができた。
	【特色】 院生および教員の間で研究に対する意識や方向性を共有できた
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への 課題	【問題点】 コロナにより全体の大学院セミナーの実施ができなかった。そのため学部生の参加状況を把握することができなかった。
	【課題】 本年度をもって修士課程の入学募集を終了するが、博士後期課程への進学を志せるような研究環境及び指導体制の充実化を進める。
根拠資料名	◆入試説明会実施記録（資料 3）、◆大学院進学者数の推移、◆中間発表会及び修士・博士論文発表会実施記録等（資料 1、資料 2）

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名上原 万里子

学科名・専攻名バイオサイエンス専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	研究室という集団の中で、研究、実習を行うことでコミュニケーション能力、リーダーシップ、協調性や対人関係の構築力を養うと共に、各個人の独自性、創造性を発掘する。	最先端の知識、技術を習得する中で、自ら情報を収集する能力、問題解決能力を養う。	自らの研究内容を自在に発信・討論できる能力を養成する。
実行サイクル	__2__ 年サイクル（令和2年～令和3年）	__2__ 年サイクル（令和2年～令和3年）	__2__ 年サイクル（令和2年～令和3年）
実施 スケジュール	分野ごとの特論実験（一）、（二）において研究室内での実験実習、担当教員とディスカッションを通じて教育指導を実施する	分野ごとの特論（一）、（二）において基礎的な知識や最新の研究の動向を理解すると共に、学会、研究会に参加する。	研究室ごとに開講・実施されるプレゼンテーション法において、プレゼンテーションの基礎を学ぶ。また研究成果を国内外の学会、研究会で発表する。
目標達成を測定する指標	研究室での活動率、および中間発表会、修士・博士論文発表会によって判断する。複数の教員で各大学院生の進捗を把握すると共に、適切な指導を行う。	中間発表会、修士・博士論文発表会で判断する。また学会、研究会で得られた情報を教員と共有する。	中間発表会、修士・博士論文発表会によって判断する。また学会での発表も評価の指標とする。
自己評価 （ ☒ を記入）	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	適切にスケジュールを実施することにより、目標を達成している。	自らの情報収集をもとに新たな課題の提案などもあり、また問題解決を行うためのコミュニケーション能力も十分に示された。	積極的な学会発表、参加を行った。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 研究（研究室活動）が主であるため、院生同士での繋がりが密である。	【長所】 異分野の教員との積極的なディスカッション。	【長所】 年2回程度の外部での発表を目指している。
	【特色】 特になし	【特色】 特になし	【特色】 特になし
現状説明を 踏まえた	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
問題点及び次 年度への課題	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	中間発表会、修士・博士発表会プログラム	中間発表会、修士・博士発表会プログラム、発表学会リスト	中間発表会、修士・博士発表会プログラム、学会発表者リスト

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	生命科学分野における先端研究を推進させる為に、国内外での研究動向、情報をいち早く収集する。	先端研究の推進には、先端技術を駆使した機器および試薬の使用が必須であるため、外部からの競争的研究資金を積極的に導入する。	学術論文の投稿だけでなく、一般向けの講義、講演会やインターネット、出版物を通じて研究成果を発信する。
実行サイクル	__2__ 年サイクル（令和2年～令和3年）	__2__ 年サイクル（令和2年～令和3年）	__2__ 年サイクル（令和2年～令和3年）
実施スケジュール	学会、研究会に参加しこれらの情報収集に役立てる。また有益な情報は学科教員間で情報交換する。	原則として、教員全員が、科学研究費補助金をはじめとする競争的研究資金に申請する。	学内、学外での模擬講義、出張講義、講演会を実施する。 Web 上での情報発信を行う。
目標達成を測定する指標	学会、研究会への参加状況を確認する。	外部資金申請者、獲得者を確認する。	投稿論文数、模擬講義、講演の回数を確認する。ホームページのコンテンツ改訂を確認する。
自己評価 (☒)を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する現状説明	適切にスケジュールを実施することにより、目標を達成している。	全員ではないが外部資金の獲得状況は良好である。 概ね、全ての教員が学内におけるプロジェクトや科学研究費補助金等の競争的研究資金に申請し、25件の研究資金を獲得した	状況は良好である。 概ね、学科所属の研究室が国内外の研究コミュニティで研究発表に努め、研究成果を論文として国際科学雑誌へ37報掲載した。 国内外において、82件の学会発表を行った
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 特になし	【長所】 特になし	【長所】 他分野の研究者同士での積極的な交流が可能。
	【特色】 特になし	【特色】 特になし	【特色】 特になし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし
根拠資料名	学会、研究会への参加状況	外部資金申請、獲得状況	論文リスト、模擬講義実績、講演会実績

3. その他に関する総合的事項

	①	②
目 標	本専攻での研究成果を海外に発信する。	生命科学分野の教育・研究を通じてグローバルな視点を持ち、世界の人々と対等に意見交換のできる人材を育成する。
実行サイクル	__2__ 年サイクル（令和2年～令和3年）	__2__ 年サイクル（令和2年～令和3年）
実施 スケジュール	国際学会への参加を奨励する。また研究成果を英語の論文としてまとめ発表する。	英語によるプレゼンテーション研修を実施する。国際協力センターの留学プログラムの周知と短期留学を奨励する。これに加えて海外でのインターンシッププログラムを企画する。
目標達成を測定する指標	国際学会への参加回数、論文掲載数を確認する。	英語プレゼン研修については発表会を行い成果を評価する。留学プログラムおよびインターンシップの参加状況を確認する。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	世界的な疫病の影響により、国際学会の多くが開催中止となったために、参加ができなかった。 研究成果を論文として国際科学雑誌へ37報掲載した。	疫病の蔓延により、海外インターンシッププログラムの企画、遂行を断念した。 オンラインアプリの活用により、海外研究者によるセミナーなどへの参加はのべ3回おこなった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 特になし	【長所】 特になし
	【特色】 特になし	【特色】 特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	掲載論文数	外国人講師による講義、短期海外研修

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名上原 万里子

学科名・専攻名林学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①	②
目 標	大学院の講義・実験実習における成績の評価に関する標準化	AP および DP に対応した大学院生の研究成果の構築とプレゼンテーションと論文発表力の向上
実行サイクル	4 年サイクル（平成 29 年～令和 2 年）	4 年サイクル（平成 29 年～令和 2 年）
実施 スケジュール	①大学院成績評価の現状と課題の明確化 ②上記①を踏まえた実施方策（改善点）の検討 ③上記②の実施方策に沿った評価実施と課題の再確認 ④目標達成に至るまで上記②と③のプロセスを毎年度実施	①専攻開催の研究成果報告会（所信・中間・最終）の実施方法の検討 ②上記①を踏まえた、試験研究計画と実施・プレゼンテーション内容評価方法の提案 ③上記②の評価方法の実施と効果の確認 ④目標達成に至るまで上記②と③のプロセスを毎年度実施
目標達成を測 定する指標	①相対評価を実施する教員数（比率） ②相対評価を実施する科目数（比率）	①全担当教員による改善度評価 ②参加学生の満足度評価
自己評価 （☑を記入）	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	大学院生が他大学院に進学、グローバル推進企業に就職する場合、GPA の提出を求められることが散見される。将来的には、学部と同様に大学院に GPA を導入すべきであり、大学院教学検討委員会にて GPA 導入を検討することとなった。また、コロナ禍という非常事態への対処には苦慮している。	研究成果公表のための要旨の電子化を推進し、学術専門分野における学協会登録団体主催の年次大会での研究発表能力を向上させている。専攻内の全研究室では、研究成果を定期的にプレゼンテーションさせるとともにプレゼンテーション能力、データの統計解析法の向上を意図した指導を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 博士前期課程の最終報告会での発表と質疑応答を審査し、指導教授による研究の位置づけと特色、学術専門分野における評価と必修科目の成績を相対的に評価している。	【長所】 学会発表要旨、PowerPoint 原稿や論文投稿のための論文執筆能力向上を意図した指導を実施している。
	【特色】 研究成果報告会（所信・中間・最終）を専攻内で公開にて実施し士気向上を図っている。	【特色】 一部の研究室では、日本語のみならず、英語によるプレゼンテーション能力の育成に努めている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 専門性の観点からすべての開講科目において教員が相対評価を実施することは困難である。	【問題点】 院生満足度調査の回答率がやや低く完全実施と意見の聴取が不十分である。
	【課題】 引き続き GPA 導入を検討する。	【課題】 院生満足度の把握を強化するとともにその結果に反映した指導を展開できるようにする。コロナ禍によりオンラインによるプレゼンテーションスキルの向上を余儀なくされたが、試行錯誤の段階にある。こうした状況への対応を継続的に検討する。
根拠資料名	大学院カリキュラム、大学院シラバス、所信、中間、最終報告会講演要旨集	大学院カリキュラム、大学院シラバス、所信、中間、最終報告会講演要旨集、大学院発表会の評価結果

2. 研究に関する総合的事項

	①	②
目 標	大学院（博士後期課程）研究支援制度への対応	森林科学、木質科学分野を対象とした専攻外研究者との共同研究成果の蓄積(研究連携の推進)
実行サイクル	____4____年サイクル（平成29年～令和2年）	____4____年サイクル（平成 29年～ 32年）
実施 スケジュール	<u>①現行の大学院博士後期課程研究支援制度への学生確保の確認</u> <u>②次年度に向けた対象学生・対象テーマの選定</u> <u>③制度への申請準備支援</u> <u>④制度への申請</u>	<u>①競争的資金等を利用した専攻外研究者との共同研究の検討、役割分担の明確化、研究計画・実施の策定</u> <u>②競争的資金等の獲得および日本学術振興会特別研究員採択に向けた活動・行動</u> <u>③資金・予算獲得できた研究の実施</u> <u>④成果の取りまとめと社会化</u>
目標達成を測定する指標	<u>①（博士後期課程等）対象学生に対する応募者数比率</u>	<u>①競争的資金等の獲得の有無</u> <u>②研究成果の学会報告数、論文投稿数、出版著作数</u>
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	進学者数が少なく在籍者のうち研究支援制度への応募もわずかであった。	専攻外の連携については、個々の教員・院生が共同研究を実施しており成果をあげている。研究室によっては、教員が実施している研究課題の成果発表と今後の課題について講演会を実施しているが、専攻全体における足並みはそろっていない。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 課程博士、論文博士の学位申請が可能であることから就職後に論文を提出して研究成果により学位を取得するシステムは構築されている。この制度の利用希望者は多い。	【長所】 客員教授や海外からの連携研究者からのプレゼンテーションや特別講義が各研究室で多く実施されている。
	【特色】 特になし	【特色】 特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 景気の動向から大学院進学よりも就職への希望者が多い。この点が進学率問題に起因する。	【問題点】 事務的用務や研究外業務の調整を図り研究に充てる時間の確保が困難な場合や時期が多く存在する。
	【課題】 進学数を増やすため、指導教授や分野に関する研究者のアドバイスや魅力発信が必須である。	【課題】 研究課題作成および問題解決能力を向上させるための勉強会を継続的に開催する必要がある。
根拠資料名	博士後期課程進学者数（進学率）	大学 HP の教員紹介

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	林学専攻の整備	大学院生の研究・生活基盤の確立支援	インターンシップ科目の活用と進路指導の強化
実行サイクル	____ 4 ____ 年サイクル（平成 29 年～令和 2 年）	____ 4 ____ 年サイクル（平成 29 年～令和 2 年）	____ 4 ____ 年サイクル（平成 29 年～令和 2 年）
実施 スケジュール	<u>①現行研究科の検討と問題点の抽出</u> <u>②森林総合科学科の教育課程改革との関係性の検討</u> <u>③上記①と②を踏まえた専門分野の見直し（内容、名称、科目等）</u> <u>④農学研究科専攻主任会議および農学研究科委員会への議題提出</u>	<u>①大学院生の生活実態の把握</u> <u>②大学院生向けの研究費・奨学金等の情報収集</u> <u>③大学院生への奨学金申請の促進</u>	<u>①大学院入学時の早い段階で大学院修了後の進路について検討させ、進路目標の設定とそれに向けた具体的計画を策定させる。</u> <u>②インターンシップ科目の受講とインターンシップへの積極的参加を指導する。</u> <u>③適宜、指導教員による進路相談を実施する。</u>
目標達成を測定する指標	① <u>令和 3 年 4 月に新たな研究科が整備されること</u>	<u>①学外奨学金応募者数</u> <u>②奨学金応募者に占める奨学金受給者割合</u> <u>③外部の研究支援制度（学振等）への応募支援</u>	<u>①就職希望学生に対するインターンシップ実施者数</u>
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	令和 3 年度からの新研究科体制に改革する整備を行った。	博士前期課程については大学院入学前に奨学金に応募するよう指導しており、希望者は全員応募した。	就職希望の院生は、指導教員が就職指導とキャリアセンターからの情報により夏季休暇中のインターンシップへ参加した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 特になし	【長所】 特になし	【長所】 特になし
	【特色】 特になし	【特色】 特になし	【特色】 特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 インターンシップへの興味は一部の学生のみに限られること。
	【課題】 修士(農学)、博士(農学)への学位名称変更による就職や社会活動における利点を明確に広報することが必要である。	【課題】 学生支援に対する都道府県や民間企業の奨学金や助成制度の情報発信を計画的に実施すること(例えば江間忠木材基金など)。	【課題】 特になし
根拠資料名	文科省への事前相談資料	奨学金推薦資料	インターンシップ参加者数の報告

研究科名 農学研究科
研究科委員長名 上原 万里子
専攻名 農業工学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①
目 標	博士前期課程におけるシラバスに基づいた院授業の実施
実行サイクル	1 年サイクル（令和 2 年度）
実施 スケジュール	前期 4 月～7 月 シラバスに沿った院授業の実施 後期 9 月～1 月 シラバスに沿った院授業の実施 12 月～1 月 令和 3 年度院授業シラバスの策定
目標達成を測 定する指標	大学院生を対象としたアンケート結果を指標とする。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	本年度は、新型コロナウイルス感染症対策により、対面での授業の実施が困難であったが、Zoom は配信教材の活用により、ほぼシラバスに基づいて授業が行われた（資料 1-1）。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・シラバスを重んじることで、教育内容の見直しが可能になる。
	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・大学院生は個々人でテーマを持って研究をしていることから、シラバスで履修生全員に共通の課題を課すことは研究の進展の妨げになる場合がある。
	【課題】 ・履修生が予習や復習に多大な時間を費やすことなく有用な知識や技術を習得できる課題の選定を行うこと。
根拠資料名	・令和 3 年度大学院シラバス（資料 1-1M, 1-1D） ・授業実施報告書（資料 1-2） ・2019 年度後学期東京農業大学大学院農学研究科授業評価アンケート集計結果（資料 1-3） ・2020 年度前学期東京農業大学大学院農学研究科授業評価アンケート集計結果（資料 1-4）

2. 研究に関する総合的事項

	①
目 標	博士後期課程の大学院生に対する国際会議での発表の推奨
実行サイクル	____ 1 ____ 年サイクル（令和 2 年度）
実施 スケジュール	4 月から適時、農業工学分野における国際会議の情報を博士後期課程の大学院生に周知し、参加発表を促していく。
目標達成を測 定する指標	令和 2 年度中、発表数／在籍院生数で 1 を目指す。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	新型コロナウイルス感染対策で、Zoom 開催となった国際会議が多かったが、3 つの国際会議で 10 人の大学院生が発表を実施しました。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・世界の動向を見据えた行動ができる素養を持った人材の輩出が可能になる。
	【特色】 ・世界の動向を見据えた行動ができる素養を持った人材の輩出が可能になる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・国際会議は国内だけでは不十分なため、渡航費の確保が難しいこと。
	【課題】 ・東京農業大学大学院生海外研究発表支援プログラムの予算が限られており十分とは言えない。
根拠資料名	・国際会議のプロシーディング（資料 2-1）

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	文化的背景を踏まえた専攻内での国際交流の活性化
実行サイクル	1 年サイクル（令和 2 年度）
実施 スケジュール	9~10 月に専攻内でイベントを開催する。
目標達成を測 定する指標	大学院生を対象としたアンケート結果および英語論文の投稿数を指標とする。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	新型コロナウイルス感染症対策のため、イベントが開催できなかった。継続して実施することとする。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・
	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・
	【課題】 ・
根拠資料名	・

学部・研究科名 農学研究科
学部長・研究科委員長名 上原 万里子
学科名・専攻名 造園学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①
目 標	実学主義，実学教育をもとに，国際的視野により，造園学の視点から「人間と自然との共存」を基本とした合理的で快適な土地空間を，科学的に創造あるいは保全し，体系化を図ることのできる人材の育成。
実行サイクル	2年サイクル（令和2年4月～4年3月）の1/2年目（実行サイクル年の初年度）
実施 スケジュール	国際感覚を養うため，造園調査法（演習）等のカリキュラムによる国内外の造園関連大学との交流を実施する。2019年度にも実施したホフストラ大学（USA）との交流を2020年6月，オスナブリュック応用科学大学(ドイツ)で行われるワークショップに同年7月に参加する予定である。
目標達成を測 定する指標	大学が実施する授業評価に基づき、大学院生が求める講義・演習内容を把握する。その結果に基づき，教員が学生に伝えるべきことを教員相互で検討する。講義・演習内容とのすりあわせを十分に検討し、授業に反映する。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	コロナ禍により国外の大学を訪問することができず、オスナブリュック応用科学大学のワークショップも1年延期となった。一方、同大学とはオンライン会議システムによるコロキウムを開催し、双方の研究に関する情報交換を行うことができた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 定期的な自己点検ができた。
	【特色】 コロナ禍によりオンライン会議が主流となったことで、比較的多い人数での国際的なイベントの開催も容易となった。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ワークショップの中止など、対面での国際交流が厳しくなった。
	【課題】 当初予定していた演習内容を変更せざるを得ない状況となり、大学院生が求める内容の代替策が必要である。
根拠資料名	◆(5)発表会、検討会、意見交流会実施記録◆(15)授業評価アンケート

2. 研究に関する総合的事項

	①
目 標	豊かな地域社会と社会資本の形成に貢献できる人材の養成を目的とし、大学院生の研究意欲の向上と修士・博士論文の質的向上を図る。
実行サイクル	2年サイクル（令和2年4月～令和4年3月）の1/2年目（実行サイクル年の初年度）
実施 スケジュール	国際学会誌への投稿，国際学会のワークショップへの出席・発表，造園学会全国大会（5月に実施），関東支部大会（12月実施），その他造園関連学会への投稿数を増やす。
目標達成を測 定する指標	国際学会誌への投稿数，国際学会のワークショップへの出席・発表数，国内造園関係学会での口頭発表・論文投稿数。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	コロナ禍により国際学会ワークショップ等の中止が相次ぎ、発表の機会が失われることが多かった。一方で、日本造園学会全国大会、技術報告集、関東支部大会等は例年通りの募集となったため、大学院生による発表の増加を図った。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 対外的な発表件数の増加を目標としている。
	【特色】 国際化が叫ばれている中，日本の造園の特徴を引き出す。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 専門学（造園）に関わる国際学会やワークショップが年々増加している状況の中，その重要性や意義について十分に啓発されていない。
	【課題】 経費等も勘案しながら国際学会（ワークショップ）への参加数も今後増やしていく。
根拠資料名	◆(7)発表会、検討会、意見交流会実施記録◆(8)学会等での発表、投稿実績

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	国際的視野による造園学の産・官・学の連携
実行サイクル	2年サイクル（令和2年4月～令和4年3月）の1/2年目（実行サイクル年の初年度）
実施 スケジュール	グローバル時代の多面的な地域環境問題の解決に果敢に挑み、自然と共生する地域づくりに貢献できる能力を養うために、フィールドワークなど（国内外）を通じて授業・研究に双方向の視点で行う。
目標達成を測定する指標	海外協定校との交流(共同開講授業への出席)数，産，官とのプロジェクト数，教育・研究成果のHPを通じての外部発信など。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	コロナ禍によりフィールドワークが難しい状況であり、特に国外への渡航は厳しく、参加を予定していたワークショップが中止になるなど状況の変化が続いた。その一方で、コロナ禍における調査研究の進め方を大学院生自身に十分考えさせると共に、コロキアムを通じてグローバルな情報を容易に取得可能な状況であることを認識させることができた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 国際化を図りつつ、コロナ禍におけるフィールドワークのあり方や授業・研究の充実を図った。
	【特色】 学部間協定校とのMOU締結後，教育・研究に活かすことのできた実質的な成果である。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 国際化を視野に入れた産・官・学の連携の理解はまだ十分とはいえなかった。
	【課題】 国際化を視野に入れた産・官・学の連携の現状の把握と啓発が必要である。
根拠資料名	◆(5)発表会、検討会、意見交流会実施記録

学部・研究科名 農学研究科
学部長・研究科委員長名 上原 万里子
学科名・専攻名 国際農業開発学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	自然科学および社会科学にわたる広範な学問領域を統合する総合的アプローチにより、農業開発や国際協力にかかわる問題の解決を図るための論理的な思考力と実践力を持つ	異なる文化や習慣を尊重した活動を展開できる人材を育成する	国内外の農業開発ならびに国際協力分野でリーダーシップをもって活躍できる人材を育成する
実行サイクル	4 年サイクル（2018 年～2022 年）	4 年サイクル（2018 年～2022 年）	4 年サイクル（2018 年～2022 年）
実施 スケジュール	自然科学と社会科学の両領域で、それぞれ基幹となる必修科目を履修し、総合的な知識を修得するとともに、農業開発や国際協力にかかわる諸問題や研究手法について学ぶことを目的とし、各研究領域をカバーする座学科目および実験・演習科目ならびにフィールド調査を選択科目として履修する。	他国の文化・社会・習慣などの多様性に十分な知識と理解を有し、柔軟な思考力と判断力、さらにコミュニケーション力を身につけ、演習・実験を通して国内外のどの地域でも自己の能力を発揮して社会に貢献することができる能力を養う。	特別講義、インターンシップ、国内外におけるフィールド調査、視察研修などを実施し、国内外の多種多様な社会の場において、パイオニア的存在としてリーダーシップを発揮できる能力を養う。
目標達成を測定する指標	カリキュラムの実施状況	専攻の全指導教授または指導准教授が出席し、発表者に対してコメントや意見を述べる専攻内研究発表会の開催状況。	特別講義、インターンシップ、国内外におけるフィールド調査、視察研修などの実施状況。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	すべてのカリキュラムを適切に実施した。	院生発表会は後学期に 2 回実施した。	国内外におけるフィールド調査は 2 名の院生が実施した。 インターンシップは 2 名の院生が実施した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 多くの教員が学部学生への教育や様々な学内業務に忙殺されており、授業以外で院生とコミュニケーションをとる時間が十分に確保できない。コロナ禍での追加業務が重なり、さらに困難な状況になってきている。	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	◆大学院シラバス	◆専攻内研究発表会実施案内 ◆大学院生名簿	◆インターンシップ、国内外におけるフィールド調査実施報告書

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	国内外の農業・農村開発の現場におけるさまざまな問題解決に貢献する課題解決型研究の推進	農業・農村開発を通じて国際的に活躍する人材を育成するため、国内外の大学・研究教育機関・国際協力機関と連携した研究活動の実施	国内外の多種多様な社会の場において、パイオニア的存在として活躍する人材を育成するため、地域・社会と連携した研究活動の実施
実行サイクル	_____4____年サイクル（2018年～2022年）	_____4____年サイクル（2018年～2022年）	_____4____年サイクル（2018年～2022年）
実施 スケジュール	学内外の競争的資金を獲得し、研究プロジェクトを実施する。	国内外の大学・研究教育機関・国際協力機関と連携した研究を実施する。	地域・社会と連携した研究を実施する。
目標達成を測定する指標	研究プロジェクトの実施状況。	国内外の大学・研究教育機関・国際協力機関と連携した研究活動の実施状況。	地域・社会と連携した研究活動の実施状況。
自己評価 （ ☒ を記入）	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	専攻教員13名中9名がのべ16件（学内4件、学外12件）の競争的資金を獲得し、研究代表者・研究分担者・プロジェクトマネージャーなどとして研究課題を遂行している。	専攻教員13名中6名がのべ17件（国内9件、国外8件）の連携研究を実施している。	専攻教員13名中6名が国内外でのべ14件の人材育成に関わる研究活動を実施しており、この研究活動は国内外の地域・社会との連携を伴う内容となっている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 多くの教員が学部学生への教育や様々な学内業務に忙殺されており、研究プロジェクトを実施する時間を十分に確保することができない。コロナ禍での追加業務が重なり、さらに困難な状況になってきている。	【問題点】 多くの教員が学部学生への教育や様々な学内業務に忙殺されており、連携研究を実施する時間を十分に確保することができない。コロナ禍での追加業務が重なり、さらに困難な状況になってきている。	【問題点】 多くの教員が学部学生への教育や様々な学内業務に忙殺されており、地域・社会と連携した研究活動を実施する時間を十分に確保することができない。コロナ禍での追加業務が重なり、さらに困難な状況になってきている。
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	◆科研費など競争的資金獲得状況	◆国内の研究機関・大学との連携研究 ◆海外の各種機関・大学との連携研究	◆国内の研究機関・大学との連携研究 ◆海外の各種機関・大学との連携研究

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	地域社会と連携した取り組みを推進する。	民間企業などと連携した取り組みを推進する。	
実行サイクル	_____ 4 _____ 年サイクル（2018 年～2022 年）	_____ 4 _____ 年サイクル（2018 年～2022 年）	_____ 年サイクル（平成 _____ 年～ _____ 年）
実施 スケジュール	地域社会と連携した取り組みを実施する。	民間企業などと連携した取り組みを実施する。	
目標達成を測 定する指標	地域社会と連携した取り組みの実施状況。	民間企業などと連携した取り組みの実施状況。	
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	専攻教員 13 名中、3 名（のべ 4 件）が地域社会と連携した取り組み（地域民間包括連携活動）を行った。	専攻教員 13 名中、1 名（1 件）が民間企業と連携した取り組みを行った。	
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 ・
	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 多くの教員が学部学生への教育や様々な学内業務に忙殺されており、地域社会と連携した取り組みを実施する時間を十分に確保することができない。コロナ禍での追加業務が重なり、さらに困難な状況になってきている。	【問題点】 多くの教員が学部学生への教育や様々な学内業務に忙殺されており、民間企業などと連携した取り組みを実施する時間を十分に確保することができない。コロナ禍での追加業務が重なり、さらに困難な状況になってきている。	【問題点】 ・
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 ・
根拠資料名	◆国内の研究機関・大学との連携研究 ◆海外の各種機関・大学との連携研究		

学部・研究科名 農学研究科
学部長・研究科委員長名 上原 万里子
学科名・専攻名 農業経済学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	大学院生が的確かつ体系的に情報を整理する能力と論理的思考能力を醸成するため、総合演習を実施し、教育力の向上を図る。		
実行サイクル	_____1年サイクル（令和2 年～ 年）	_____年サイクル（平成 年～ 年）	_____年サイクル（平成 年～ 年）
実施 スケジュール	第1回総合演習の実施（6月） 第2回総合演習の実施（11月） 第3回総合演習の実施（12月） 第4回総合演習の実施（1月）		
目標達成を測定する指標	各総合演習の報告案内資料		
自己評価 （☑を記入）	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明			
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名	各総合演習の報告案内資料		

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	農業経済学専攻では、大学院生が社会科学の専門領域における知識と研究能力を修得することを目標としており、各専門領域の学会で、教員との共同研究を含め研究発表や学会誌への投稿を行い、研究力の向上を図る。		
実行サイクル	_____1年サイクル（令和2年～ 年）	_____年サイクル（平成 年～ 年）	_____年サイクル（平成 年～ 年）
実施 スケジュール	各専門領域の学会発表・学会誌への投稿（随時）		
目標達成を測 定する指標	大学院生の学会発表、学会誌投稿・受理の状況等		
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明			
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・学会誌への掲載や、学会報告賞など、順調に成果が出ている。	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名	農大 HP、教員の業績一覧、「農経研究報告」等		

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	近年、農業経済学専攻では入学者が少ない傾向にある。博士前期課程、博士後期課程ともに、入試受験者確保に向けて努力する。		
実行サイクル	_____1年サイクル（令和2 年～ 年）	_____年サイクル（平成 年～ 年）	_____年サイクル（平成 年～ 年）
実施 スケジュール	第1回大学院入試説明会の実施（5月） 第2回大学院入試説明会の実施（6月） 学内推薦入試（5月） 1期入試等（7月） 第3回大学院入試説明会の実施（11月） 2期入試等（1月）		
目標達成を測 定する指標	<u>入試説明会案内資料</u>		
自己評価 （☑を記入）	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明			
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名	入試説明会案内資料		

学部・研究科名 農学研究科
学部長・研究科委員長名 上原 万里子
学科名・専攻名 国際バイオビジネス学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①	②
目 標	大学院の講義における成績の相対評価化 (将来的な GPA 導入の環境整備)	AP/DP に適合した大学院生の研究・プレゼンテーション能力の向上
実行サイクル	4 年サイクル (平成 29 年～ 令和 2 年)	4 年サイクル (平成 29 年～ 令和 2 年)
実施 スケジュール	①大学院成績評価の現状と課題の明確化 ②上記①を踏まえた実施方策 (改善点) の検討 ③上記②の実施方策に沿った評価実施と課題の再確認 ④目標達成に至るまで上記②と③のプロセスを毎年度実施	①専攻開催の研究成果報告会 (中間・最終) の実施方法の検討 ②上記①を踏まえた、新たな研究・プレゼンテーション内容評価方法の提案 ③上記②の評価方法の実施と効果の確認 ④目標達成に至るまで上記②と③のプロセスを毎年度実施
目標達成を測 定する指標	①相対評価を実施する教員数 (比率) ②相対評価を実施する科目数 (比率)	①全担当教員による改善度評価 ②参加学生の満足度評価
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	学生が海外の大学院に進学を希望する場合、GPA の提出を求められることがある。このため、将来的 には大学院に GPA を導入すべきであると考え、大学院教学検討委員会にて GPA 導入を検討した。	研究報告のためのレジメのフォーマット化 (日本語・英語) を推進し、学外における研究発表原稿作成能力 を向上させている。ほとんど全ての研究室で、研究成果を定期的にプレゼンテーションさせるなど、プレゼ ンテーション能力の向上を意図した指導を行った。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 博士前期課程の最終報告会を審査し、審査結果に基づき必修科目の成績を相対評価している。	【長所】 学会報告資料や論文投稿のための論文作成能力向上をはかっている。
	【特色】 博士前期課程の最終報告会を学位取得のための最終口頭試験と位置づけ、院生の奮起を促している。	【特色】 日本語のみならず、英語によるプレゼンテーション能力の育成に努めている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 すべての科目・教員が相対評価を実施することは困難である。	【問題点】 専攻独自の学生満足度調査を実施するに至っていない。
	【課題】 引き続き GPA 導入を検討する。	【課題】 コロナ災禍のため専攻独自に満足度を測定しておらず、次年度より計測していきたいと考えている。
根拠資料名	◆大学院カリキュラム、◆大学院シラバス、最終報告会資料 一部科目において相対評価を実施した教員数 15 人 (100%)、 相対評価を実施した科目数 2 科目 (6.3%)	◆大学院カリキュラム、◆大学院シラバス、◆レジメのフォーマット、中間報告会資料、修士論文フォー マット、大学院発表会の評価結果

2. 研究に関する総合的事項

	①	②
目 標	大学院（博士後期課程）研究支援制度への対応	バイオビジネス分野を対象とした専攻外研究者との共同研究成果の蓄積
実行サイクル	____ 4 ____ 年サイクル（平成 29 年～ 令和 2 年）	____ 4 ____ 年サイクル（平成 29 年～ 令和 2 年）
実施 スケジュール	<u>①現行の大学院博士後期課程研究支援制度への応募可能性の確認</u> <u>②次年度に向けた対象学生・対象テーマの選定</u> <u>③制度への申請準備支援</u> <u>④制度への申請</u>	<u>①外部資金等を利用した専攻外研究者との共同研究の検討、役割分担の明確化、研究計画の策定</u> <u>②外部資金等の獲得に向けた活動・行動</u> <u>③資金・予算獲得できた研究の実施</u> <u>④成果の取りまとめと社会化</u>
目標達成を測 定する指標	<u>①（博士後期課程等）対象学生に対する応募者数比率</u>	<u>①外部資金等の獲得の有無</u> <u>②研究成果の学会報告数、論文投稿数、出版著作数</u>
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	令和 2 年度は 1 名が応募し 1 名が採択された。コロナ災禍のため研究支援対象となる海外発表が自粛されたことから研究支援制度の応募が少なかった。	外部との共同研究については、個々の教員・院生において共同研究が実施されており個々に成果をあげている。コロナ災禍による対面での勉強会が開催できないことから、専攻全体で統一した共同研究の構想、研究計画を行うには至っていない。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 特になし	【長所】 特になし
	【特色】 特になし	【特色】 特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 応募数がなかった。	【問題点】 コロナ災禍のため勉強会を開催できていない。
	【課題】 応募数を増やすため、指導教授からの助言が必要である。	【課題】 研究課題作成のための勉強会を継続的に開催する必要がある。
根拠資料名	◆応募者数比率 17%（6 分の 1）	大学 HP の教員紹介

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	国際バイオビジネス学専攻教育課程の整備	大学院生の研究・生活基盤の確立支援	インターンシップ科目の活用と進路指導の強化
実行サイクル	____ 4 ____ 年サイクル（平成 29 年～ 令和 2 年）	____ 4 ____ 年サイクル（平成 29 年～ 令和 2 年）	____ 4 ____ 年サイクル（平成 29 年～ 令和 2 年）
実施 スケジュール	<u>①現行教育課程の検討と問題点の抽出</u> <u>②国際バイオビジネス学科の教育課程改革との関係性の検討</u> <u>③上記①と②を踏まえた専修分野の見直し（分野数、内容、名称、科目等）</u> <u>④農学研究科専攻主任会議および農学研究科委員会への議題提出</u>	<u>①大学院生の生活実態の把握</u> <u>②大学院生向けの研究費・奨学金等の情報収集</u> <u>③大学院生（＋入学予定者）への奨学金申請の促進</u>	<u>①大学院入学時の早い段階で大学院修了後の進路について検討させ、進路目標の設定とそれに向けた具体的計画を策定させる。</u> <u>②インターンシップ科目の受講とインターンシップへの積極的参加を指導する。</u> <u>③適宜、指導教員による進路相談を実施する。</u>
目標達成を測定する指標	① <u>令和 3 年 4 月に新たな教育課程が整備されていること</u>	<u>①学外奨学金応募者数</u> <u>②奨学金応募者に占める奨学金受給者割合</u> <u>③外部の研究支援制度（学振等）への応募支援</u>	<u>①就職希望学生に対するインターンシップ実施者数</u>
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	教育課程を希望する大学院生が入学していないが、令和 3 年度からの新研究科体制ならびに新カリにおいて、教育課程（教職科目）の整備を行った。令和 2 年度の合同研究科委員会において教職科目が認可されたとの報告があった。	博士前期課程については大学院進学時（入学前）に外部の奨学金に応募するよう指導した。日本人学生は応募していないが生活基盤が確立しているためと思われる。	コロナ災禍のため ABE イニシアティブの留学生 1 名以外はインターンシップに参加したとの報告はなかった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 特になし	【長所】 特になし	【長所】 特になし
	【特色】 特になし	【特色】 留学生が積極的に応募している	【特色】 特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 採択は必ずしも多くない	【問題点】 留学生の就職希望の実態把握が困難である。
	【課題】 特にないが、今後も継続して取り組むべき課題である。	【課題】 日本語による書類作成の指導体制ができていないため、指導教員の負担が大きい。サポート体制の構築は今後も継続すべき課題である。	【課題】 留学生は帰国か日本で就職かの決断が遅いため、インターンシップの検討ができていないことが課題である。
根拠資料名	文科省への事前相談資料，合同研究科委員会資料	奨学金推薦資料（一部のみ、個人情報につき部外秘） 奨学金応募者数 4 名（採択数は不明）	インターンシップ参加者数 1 名

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名上原 万里子

学科名・専攻名環境共生学

1. 教育に関する総合的事項

	①
目 標	地球環境の悪化に伴う自然生態系保全やひとの生活環境への影響を削減方策など、環境共生型社会の構築を具現化するための理論や方法を探求する研究能力を有し、独創的かつ学術的な立場から社会に貢献しようとする広い視野，問題意識，強い意欲を教育する．とくに，本専攻は，2021 年度から募集停止になる．そのため，現在在籍する 15 名の院生の学位取得のための指導体制が最も優先される目標となる．
実行サイクル	3 年サイクル（令和 2 年～4 年）
実施 スケジュール	各指導教員による院生に対する個人指導の充実，専攻における院生の口頭論文発表会実施の充実（学位論文公开发表会前に中間発表会の充実），各指導教員による国内および国外学会発表の推進，国内外の おける学会誌への研究論文投稿の推進，より質の高い学位論文の作成指導について，3 年間かけて充実していく．
目標達成を測 定する指標	指導教員による綿密な研究論文指導を通して，各院生には年 2 回のスクーリング時に研究発表会および討論会を行い，専攻教員が評価する．
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	生物学，資源学および地域学を基礎とし総合的・複合的科目を通して，学位授与のための教育課程を編成し，各指導教授が研究手法を通じて研究発表能力および学位論文執筆等を体得できるように教育してい る．
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 多様な専門を有する社会人院生が在籍するため自然・社会・人文科学が融合した総合科学分野からの視点で研究ができる．
	【特色】 環境共生に関する総合的・複合的な視野をもち高度な研究能力を有する人材を養成できる．
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 社会人院生が多く在籍するため，指導教授との相談は密に行われているが，院生同士の研究交流の機会多くする努力が必要である．
	【課題】 指導教授および院生全員による研究発表スクーリング等の機会を増やし，さらに研究交流を密にする．2020 年度、募集停止のため、今後、在籍院生全員が期間内で学位取得できるよう、専攻教員が全員で指導 していく。
根拠資料名	専攻会議議事録，授業実施評価報告書 研究発表会抄録 ◆高等論文発表会実施記録、中間発表会実施記録、◆論文投稿実績

2. 研究に関する総合的事項

	①
目 標	現在の院生の半数以上は海外に眼を向けた食品流通に関する研究であることから、将来にわたり研究発表の場の国際化を推し進めるとともに、地球規模での環境共生に係わる問題研究を進める。
実行サイクル	3年サイクル（令和2年～4年）
実施 スケジュール	現在の院生による研究が、より質の高い成果が得られるよう専攻指導教員が支援しながら、年次ごとに進める。また、院生には、環境共生学専攻の研究の進め方についても逐次理解してもらう。
目標達成を測定する指標	院生には、年2回のスクーリング時に研究発表会および討論会を行い、専攻教員が評価する。さらに、国内外の学会で研究発表を行い、その評価を専攻内教員全体で、学位論文執筆状況を確認しながら進める。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	院生は、国内外において、研究活動および研究学会発表を実施しており、その成果を学会誌等へ掲載することを目指しており、それに対して指導教授が丁寧に指導している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 授業以外と時間においても、丁寧な研究および論文作成指導を実施している。
	【特色】 院生に対して、研究発表会などを通して、指導教授ばかりでなく、他の専攻教員からも、指導を行える体制を整えている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし
	【課題】 2021年度、募集停止のため、今後、在籍院生全員が期間内で学位取得できるよう、専攻教員が全員で指導していく。
根拠資料名	専攻会議議事録、授業実施評価報告書 研究発表会抄録 ◆スクーリング実施記録、

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	本専攻は、2021 年度から募集停止となったため、現在在籍する院生の期限内での学位申請・取得にむけて、専攻内教員が一致団結し、環境共生学多方面からの指導を行い、幅広く農学分野で環境共生学に関する高度な知識と独創的研究能力を学べるように努力する。
実行サイクル	3 年サイクル（令和 2 年～4 年）
実施 スケジュール	専攻委員会やスクーリングを通じて、各院生に対して、研究進捗状況を常に把握し、院生が期限内に学位所得できるような指導を構築する。
目標達成を測 定する指標	在籍院生全員（12 名）の期限内の学位取得をめざす。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	2021 年度から募集停止となったため、現在在籍している大学院生に対して、指導教員を中心とした指導体制の充実をはかっている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 働きながら 3 年間で学位取得できるよう、指導体制を明確化し、努力している。
	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし
	【課題】 2021 年度、募集停止のため、今後、在籍院生全員が期間内で学位取得できるよう、専攻教員が全員で指導していく。
根拠資料名	審査報告概要並びに審査報告会実施記録